

世界遺産

石見銀山遺跡の 調査研究14

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 14

世界遺産

石見銀山遺跡の 調査研究14

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 14

令和6(2024)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

■例言

1. 本書は、高根県教育委員会と大田市教育委員会が実施した令和4年度の石見銀山遺跡関連事業の概要と、県市担当職員及び調査関係者が共同事業で行っている調査研究活動の成果を掲載するものである。
2. 本書の編集は、大田市教育委員会教育部石見銀山課の協力を得て高根県教育庁文化財課世界遺産室で行った。

■目次

I 令和4年度の石見銀山遺跡関連事業

1. 石見銀山遺跡総合調査研究事業の概要	3
2. 基礎調査研究事業	3
3. テーマ別調査研究事業	7
4. 各種会議の開催状況	
(1) 石見銀山遺跡調査整備活用委員会	10
(2) 石見銀山遺跡保存管理委員会	11
(3) 石見銀山遺跡景観保全審議会	11
(4) 石見銀山遺跡整備検討委員会	12
(5) 石見銀山官民協働会議	12
5. 調査研究成果の公表	12
資料1 石見銀山入込客数の推移	20
資料2 令和4年度石見銀山世界遺産センター入館者の状況	21
資料3 令和4年度大久保開歩一般公開限定ツアー入坑者数の状況	22

II 令和4年度刊行の石見銀山遺跡関連書籍・論文

III 石見銀山遺跡調査研究

岩橋孝典

高根県最古の「皇紀元」紀年銘について - 慶応三年建立の豊栄神社小鳥居 - 31

遠藤浩巳

城上神社拝殿ふすま下張り文書の調査 - 本殿造営における職人「備前石工」と「木挽」 - 45

西尾克己・持田直人

美郷町・松林山定徳寺について - 石見銀山百か寺の調査 - 51

I

令和4年度の石見銀山遺跡関連事業

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 14

1. 石見銀山遺跡総合調査研究事業の概要

高根県と大田市では、石見銀山遺跡の世界遺産登録を目指して平成8年度から総合調査研究を実施し、その成果があつて平成19年7月2日に世界文化遺産に登録された。しかし、石見銀山遺跡については、その価値がわかりにくいこともあり、登録後も遺跡のもつ価値をより高めるために調査研究を継続して実施することになった。

継続して行う調査研究は、登録前から実施していた基礎調査研究の他に、テーマを絞り込み、多分野の研究者が共同して調査研究を行うテーマ別調査研究も開始することにした。

基礎調査研究は、発掘調査、石造物調査、文献調査、科学調査、問歩調査、地図・地名・人権同和問題調査、生物環境調査、資産保全調査などを実施している。それらの成果ははままり次第、報告書として随時刊行されている。

テーマ別調査研究は、「石見銀山遺跡の歴史」と「東アジア鉱山の比較」の2つの大きなテーマを設定し、それぞれを解明するための小テーマを設けて、概ね3年周期ごとに研究成果が公表できるように進めて行くことにした。

この研究では、考古学、文献史学、歴史地理学、地質学、鉱山学、植物学などの外部研究者に石見銀山遺跡客員研究員として参加を求め、年2～3回の共同検討会を開催しながら進めている。

令和4年度のテーマ別調査研究の「石見銀山遺跡の歴史」では、令和2年度から研究を開始している「港町温泉津の景観と変遷」の研究成果について、内容をとりまとめた報告書を刊行した。これによりテーマ研究としては5冊目の成果報告書となった。

「東アジア鉱山の比較」は、「国内鉱山比較」と「海外鉱山比較」の2つに区分され、「国内鉱山比較」では、「鉱山道具」について佐渡金銀山・生野銀山等との比較研究を進めている。

「海外鉱山比較」では、東アジアに限定せず、同時代の世界各地の鉱山について、国内の研究者から情報を収集し、石見銀山との比較が可能な研究項目

の抽出を行って比較研究を進めている。

これらの調査研究成果は、報告書の他に展示等を通して積極的に情報発信を行っている。

本調査研究事業に伴う令和4年度の成果物は、発掘調査報告書、歴史文献調査報告書、テーマ研究「港町温泉津の景観と変遷」報告書、本年報兼調査研究報告を刊行した。詳細は後掲の刊行物一覧のとおりである。

(高根県：岩橋孝典)

2. 基礎調査研究事業

(1) 発掘調査（大谷地区）

令和4年度は、令和3年度までの調査で課題となっていた建物跡（SB01）の利用状況の解明と、溝跡（SD01）の流路確認を主な目的として発掘調査を実施した。

発掘調査によって、SD01の起点と流末が確認でき、当地区内における流路を確定することができた。その成果によって、当地には溝に囲まれた東西約34m、南北約7.5mで、一部が鍵形に屈曲した「コ」字状の敷地が設けられていたことが判明した。

この敷地内にはSB01・SB04と2つの建物跡があり、SB01は東西15m以上、SB04は東西6m以上の規模で、SB01はSD01に沿って敷地範囲いっぱい建てられていたと推定できる。さらに、敷地の外側では埋植遺構を持つ小規模な建物跡（SB02）が検出されたことから、大谷の調査区内には3棟の建物があったことが把握できた。また、SD01の約25m南では先行する溝跡（SD11）が検出されたことから、SB01が建てられる前の敷地は、南側に狭かったことも判明している。SD11の埋土からは17世紀後半から18世紀中ごろの陶磁器類や、SB01の前身建物に関連するとみられる木製品が出土していることから、18世紀中ごろに敷地の拡張や、建物の更新などがあつたと考えられる。

SB01の内部には仕切りとみられる石列や複数の炉跡が検出され、いくつかの作業場を持つ集約的な製錬所であったことが判明した。検出された炉跡は一樣ではなく、径30cm程度のものや、周囲に焼土や

炭化物が広がり、埋土や底面にスパイクが堆積したものなどいくつかの種類がある。また、下層遺構を踏襲しながら新たに作業場を構築した状況も確認できている。建物の存続期間において内部の整備や設備更新などが行われていたこともうかがわれる。

寛政元（1789）年ごろに描かれたとされる「石見銀山鹿絵図」の、大谷に該当する箇所には拠点的な製錬所とみられる「御銀吹所」という施設が描かれており、建物の存続時期や規模、内部の遺構などからSB01がそれに該当する可能性が高い。

なお、明治時代の記録からは、少なくとも明治11年には大谷に製錬所がなかったことを読み取ることができる。そのため、SB01の建物自体は近代にも残っていたかもしれないが、製錬所としては稼働していなかったと考えられる。



大谷地区 発掘調査範囲（北から）



大谷地区 N区南東部検出遺構（東から）

大谷地区の発掘調査以外に、史跡内や伝建地区内で地表面掘削を伴う現状変更行為が発生した際に随時立会・試掘調査の対応をとっている。令和4年度は立会調査を中村プレイス地点・松原家地点・波根

田家地点・伊藤家北地点の4か所で、試掘調査をさくら保育園建設予定地で実施した。

（大田市：山手貴生）

（2）考古資料分析調査（科学調査）

石見銀山遺跡の実態を自然科学的な手法で解明する調査を行っている。

「科学調査報告書（5）」（令和3年度刊行）に掲載したトレハロース法によるドッグスパイクの保存処理についての報告や、平成28年度に温泉津町寺町地区で出土した金属製品の蛍光X線分析結果報告などの調査指導会を令和4年10月7日に実施した。鳥越俊行氏（東京国立博物館）からは携帯型蛍光X線分析装置の有用性と国内にある古丁銀類の詳細分析結果が示された。

令和4年12月12日の指導会では村上隆氏（高岡市美術館館長）から鳥根県立古代出雲歴史博物館所蔵古丁銀類の科学分析結果及び考察が報告された。

（鳥根県：渡部麻生）

（3）石造物調査

石見銀山遺跡の歴史の変遷過程を石造物という特定の観察対象を通して明らかにし、鉱山遺跡としての特性を把握することを目的に実施している。石造物には様々な内容のものがあるが、現在は鉱山の盛衰状況が直接的に反映されると考えられる墓石を重点的に調査している。

石見銀山遺跡ではこれまでの四半期世紀におよぶ石造物調査の成果が蓄積されており、令和2年度から総括する報告書の作成に向けた作業に着手している。今年度も引き続き、調査を実施した石造物について、時期・種別ごとの分布、宗派、戒名などに関するデータの解析を進めている。

現地調査は、豊栄神社境内の石造物調査を実施した。平成28年度～令和4年度に至る豊栄神社の建造物修理及び境内地の整備に伴い、境内地に堆積した土砂の一部抜き取り工事が実施された。これにより昭和18年9月の水害で倒壊・一部埋没していた石造物の一部が回収された。

豊栄神社の石造物については、平成13年度には鳥根県教委・大田市教委による石造物調査が実施され、境内に造立されている石造物について実測と銘文の記録がなされている。

このたび、建造物保存修理事業に伴って新規に見された石造物について実測作業を行うとともに銘文の記録を実施した。また、既調査分と併せて銘文に刻まれた長州藩の諸隊や人物について、検討を加えて豊栄神社の石造物造立の背景を探った。そして紀年銘にある一部の人物について、その前後の履歴を追跡した。

石造物調査では各石材の実測図化を実施して百点以上を図化した。この調査概要については、同年度に大田市教育委員会によって刊行された『豊栄神社保存修理報告書』にその成果の一部を掲載した。また、石造物調査報告書としては、令和6年度に刊行予定である。

調査指導会は1回開催した。3月15日は佐藤聖聖氏（滋賀県立大学）から豊栄神社の石造物について現地で指導を受けるとともに、総括報告書の構成及び内容について意見をいただいた。3月16日は西尾克己氏により総括報告書の構成について指導を受けた。（鳥根県：岩橋孝典）



豊栄神社石造物調査の現地説明会

（4）文献調査

これまで文献調査においては、以下の4点を研究目的として調査研究と、石見銀山に関する文献史料の収集を進めてきた。

- ・石見銀山の支配・社会・技術・経済について解明をめざす。
- ・周辺地域を含め悉皆的に中近世史料の調査を

行う。

- ・石見銀の国内流通（日本海水運等）、銀を介した対外貿易の情報を収集する。
- ・鉱山の比較研究へ向けに国内外鉱山史料の調査・収集を行う。

【文献調査実施状況】

令和4年度は、大森町域または銀山料内に所在する商家等に残された史料の調査を行った。主な文献調査の実施状況は次のとおりである（史料名、所蔵先、調査期間）。

- ①熊谷家文書（大田市教育委員会寄託・通年実施）
- ②泉家文書（個人蔵・令和4年8月25日～26日、同5年3月27日～28日）
- ③伊藤家（個人蔵・令和5年3月29日～30日）

【主な文献調査の概要】

①熊谷家文書

江戸時代に大森代官所の用途・郷宿などをつとめた大森町の有力町人の家に伝来した古文書である。

本年度は、大田市立中央図書館に保管されている熊谷家文書のうち、未整理の箱等全てに群番号を登録した。その結果群番号は1から157で確定し、うち未着手の群が約100存在する。これら未着手分の中身は近代以降の書籍や雑貨・断簡類が多く、今後整理作業（目録化・撮影）の速度を上げたい。

整理作業は終了に向かいつつある一方で、今後の課題としては将来的な目録データの公開を視野に目録内容の統一を図り、細部の修正を行う作業が必要である。

②泉家文書

大田市仁摩町宅野で江戸時代に廻船業等を営んでいた泉家の古文書であり、廻船業の諸帳簿・商品売買の仕切状・金銀貸借関係保証書類がその中核である。

本史料は継続調査中であったが、令和2年度、同3年度はコロナ禍のため調査を休止した。令和4年度に再開し、8月と3月に実施した。近世から近代にかけての勘定書や書状が大量に未整理で残されて

おり、完了にはなお数年を要する見込みである。

③伊藤家文書

大田市温泉津町温泉津で元湯を営む伊藤家の古文書であり、過去に石見銀山歴史文獻調査団の故田中圭一筑波大学名誉教授が中心になって調査がされていたが、なお未整理のまま残されている古文書の整理依頼が所有者からあり、令和4年度から着手した。

令和5年3月に確認したところ、書類類を中心になお多数が未整理の状態になっており、今後、複数年かけての調査が必要である。

以上のほか、江津市図書館、山口県文書館、岩国徴古館、広島県立文書館も訪問し、館蔵古文書の調査を行った。

【文献調査指導会の開催】

文献調査を実施するにあたり有識者から調査指導の助言を受けるため、定例の指導会を開催している。令和4年度は令和4年7月13日と同5年1月20日の2回、オンライン会議方式で開催した。

【文献調査報告書の刊行】

毎年文献調査の成果として報告書を刊行している。令和4年度は近世の石見銀山で山師として活動した高橋家に伝わる日記を翻刻し、『石見銀山歴史文獻調査報告書18 銀山師高橋家歳年中日記』として刊行した。

高橋家は18世紀中頃に安濃郡川合村から銀山町に移住し、19世紀初めから山師として活動した家で、歴代当主が町役人や山方の役職を勤めた。

翻刻した「銀山師高橋家歳年中日記」だが、筆者は高橋家6代目の富三郎で、安政3年(1856)正月8日から同6年(1859)12月晦日までのほぼ毎日の記事が残っている。内容は銀山町で発生した災害・事故、住民の出産・結婚・病氣・死去、銀山町での年中行事、住民どうしの文芸活動など多岐にわたり、近世末期の銀山町の日常を探る上で重要である。

なお、今回の報告書刊行にあたり、高橋伊武氏及

びNPO法人石見銀山資料館から多大なご高配を賜った。記して謝意を表したい。

(鳥根県：倉恒康一)

(5) 人権・同和問題調査

石見銀山遺跡の調査研究においても、近世の身分制度や現在の人権・同和問題を十分に理解し、歴史的事実の解明によって、これら諸問題の解決を目指すなくてはならない。本事業では、調査研究に加えて研修会と先遣地における関連施設の視察を実施している。

令和4年度は、令和5年2月28日に石見銀山世界遺産センターを会場に研修会を開催し、湊秀樹氏(大田市人権推進課長)による講演「大田市における人権・同和問題研修の必要性について」及び遠藤浩巳氏(大田市石見銀山課職員)による講演「石見銀山と人権・同和問題の歴史」を聴講した。参加者は鳥根県・大田市の文化財関係者を中心に参加者は24名であった。

(鳥根県：倉恒康一)

(6) 自然・環境調査

生物環境調査

石見銀山遺跡は「石見銀山遺跡とその文化的景観」という名称で世界遺産に登録されているように、かつての鉱山経営の痕跡が自然景観と一体となって残っている点が高く評価されている。このため、平成18・19年度に相関植生図の作成、生物相調査を実施し、代表的な自然環境相を有する地点・地域の把握を行った。その結果を受け、平成20年度からその年次変化を把握するための定期的な調査(モニタリング)を実施している。

生物相調査では、銀山川流域、山吹城跡登山道、金生坑～釜屋間歩、鶴ヶ浦、沖泊、石見銀山街道の各地区の中で、必要な箇所をそれぞれ選定して踏査を実施し、確認された生物種や周辺の植生状況などを記録して自然環境の概略を把握した。調査方法は、踏査ルートを歩きながら生物相の記録を行い、コウモリ等の特定の生物相が見込まれる地点でその確認調査を実施した。生物相の記録は、短期的な影響が

出やすい移動性の低い生物を中心とし、中・大型哺乳類や鳥類は適宜記録した。

上記の結果を踏まえ、対象地域の主要箇所から今後のモニタリング調査に適した箇所と項目を絞り込むとともに、継続的に実施可能な手法を検討した。それを受けて銀山川遊歩道、山吹城登山道、本谷地区、駒ヶ浦港、沖泊港について年2回（春・秋）の踏査を行い、指標種として設定した動植物の有無を確認するとともに、生物環境の概要を記録した。また、大久保間歩、矢滝城跡、石見城跡において、特定動植物（コウモリ類、洞窟性昆虫類、ギフチョウ、ラン類など）の調査を行い、生息状況を記録した。

現在までのところ、世界遺産登録以後の見学者の増加による、生物環境の大きな変化は見られないが、今後も継続的に調査を実施していく予定である。

なお、調査については公益財団法人しまね自然と環境財団に委託して実施した。（島根県：渡部麻生）

（7）資産保全調査

石造物等の劣化調査

石見銀山遺跡に多く所在する石造物等について、劣化・損傷の原因を究明し、今後の適切な保存方法を検討するために実施している調査である。

令和4年度は継続調査として、龍宮寺に所在する、代官浅岡彦四郎墓と川崎平右衛門墓、豊栄神社石造物（水桶・灯籠）について劣化・損傷状況の経過観察、温湿度及び石材表面温度の計測を行った。

11月21日の調査指導会では奈良文化財研究所脇谷草一郎氏、柳田明進氏より今後のモニタリング調査について指導を受けた。豊栄神社石造物で劣化の著しいものは倒壊の危険性があることから解体し現地保存した。修理事業に伴い新たに発見された石造物については銘文等を調査し埋設保存している。

間歩の現況確認調査

県が鉱業権を所有する間歩について、現況確認調査を実施した。調査の結果、劣化がみられた1箇所について対策工事を行っている。調査および工事は、昭和開発工業株式会社に委託して実施した。

（島根県：渡部麻生）

3. テーマ別調査研究事業

（1）経緯

島根県教育委員会では、石見銀山遺跡の価値をより高めるために、世界遺産登録前から行っている基礎調査研究に加えて、平成20年度からテーマを絞った調査研究をスタートさせた。

第1期のテーマ選定にあたっては、長年にわたって行われた発掘調査の成果や石造物実地調査などの成果から石見銀山遺跡の最盛期の広がりや推定し、景観復元を主要なテーマとして「最盛期石見銀山の復元」を掲げた。

また、もう一つのテーマとして、世界遺産登録時の付帯事項としてユネスコから比較研究を要請されていることから、石見銀山と国内外の諸鉱山との関係解明を目的とした「東アジアの鉱山比較研究」をテーマに設定した。テーマ別調査研究は、考古学、文献史学をはじめ歴史地理学や鉱床・地質学など関係諸科学の研究者を客員研究員に委嘱し、島根県教育委員会・大田市教育委員会との共同研究として開始した。

第1期の調査研究は平成20～22年度まで実施し、「石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1」として刊行した。しかしながら、計画していた報告の一部が収録できず、またわずか3年間の調査研究だけでは最盛期石見銀山の復元は困難であったため、計画していた再現イラストの作成を見送り、計画を変更して第2期も同じテーマを継続していくことになった。

第2期は平成23年度から3年間にわたり銀の流通とその拠点をテーマに街道と港・港町を対象に調査研究を行った。平成27年度までに成果の集約を行い、平成28年度に第1期の未収録分を含めて「石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書2」として刊行した。

「東アジアの鉱山比較」についても調査研究を並行して進め、上記報告書において公表しているが、平成25年度から3年間で実施した台湾鉱山との比較研究については「石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書3」として平成28年度に刊行している。

平成26年度からは「石見銀山鉱山町の変遷」をテーマとして第3期の研究に着手し、その成果については「石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4」として平成30年度に刊行した。

令和元年度に研究計画に関して検討をおこない、「石見銀山の歴史」「最盛期石見銀山の復元」「石見銀山鉱山町の変遷」の第4期テーマは「港町温泉津の景観と変遷」とした(令和2～4年度)。「国内鉱山比較研究」は「鉱山道具」について佐渡金鉱山・生野銀山との比較研究(令和2～5年度)、「海外鉱山比較研究」は「鉱山運営」を研究項目として、ポトン銀山などとの比較研究(令和3～5年度)に取り組みこととした。またテーマ別研究で得られた成果は、展示等を通じて積極的に情報発信をおこなうこととした。

本テーマ別調査研究にかかる各員研究員は以下のとおりである(50音順)。

「石見銀山の歴史」

鳥越 俊行(東京国立博物館学芸研究部保存修復課調査分析室長)

仲野 義文(石見銀山資料館館長)

西尾 克己(松江市史松江城部会長)

乗岡 実(丸亀市教育部総務課文化財保護室)

原田洋一郎(都立産業技術高等専門学校教諭)

「東アジアの鉱山比較研究(国内)」

植田恵美子(加西市教育委員会生涯学習課主任)

宇佐美 亮(佐渡市世界遺産推進課世界遺産保存係長)

仲野 義文(石見銀山資料館館長)

中村 唯史(三瓶自然館企画情報課調整幹)

波部 浩二(新潟県立歴史博物館学芸課専門研究員)

「東アジアの鉱山比較研究(海外)」

津村眞輝子((公団)古代オリエント博物館研究部長)

仲野 義文(石見銀山資料館館長)

真鍋 周三(兵庫県立大学名誉教授)

(2) 港町温泉津の景観と変遷

このテーマ研究事業は令和2年度からの3年計画で、以下の目的を掲げ進めている。

- 1) 温泉津の成立と発展の歴史を明らかにする。
- 2) 鉱山町の盛衰と港町の盛衰の比較を行い、港町の機能変化を探る。

3) 港町の景観と暮らしの構造を明らかにする。研究は県市職員を中心に、各員研究員も参画する体制とし、考古、建造物、文献の各分野で研究を進めている。

令和4年度は、昨年度に引き続き温泉津地区の発掘調査の整理作業、仁摩温泉津地区の遺跡集成、温泉津地区の石造物・石垣調査を実施した。石造物調査は対象範囲を広げ、大田市大代町大家や温泉津町井田地区で実施した。石垣調査は温泉津の有力商人木津屋敷敷地の護岸について、屋敷園との比較検討を現地でおこなった。また石垣を備前石工が製作したことで知られる野井神社(大田市長久町)所蔵の旧大田市内に所在する神社の棟札(写)について、写真撮影も実施した。

こうした研究成果については、令和4年度末に報告書「港町温泉津の景観と変遷」として刊行した。これらの成果については展示等を通じて情報発信していくこととしている。

各員検討会・調査指導会等の会議は下記のとおり開催した。

【各員検討会】

第4回

日時：令和4年10月21日

場所：石見銀山世界遺産センター

報告：開野大丞「第3回各員検討会の振り返りと調査進捗報告」

鳥越俊行「東京国立博物館が所蔵する古丁銀類の蛍光X線分析について」

山手貴生「温泉津発掘調査の成果について」

開野大丞「石造物からみた温泉津」

中安恵一「近代の入手舗(竹下家)の廻船について」

榎原博英「石見浜田」

客員研究員：乗岡、西尾、仲野、鳥越、原田
 県市職員：間野、岩橋、渡部、倉恒、中安、山手、
 遠藤、新川、尾村、榎原（浜田市）、
 持田（江津市）、松田（同）

第5回

日時：令和5年3月16日・17日
 場所：石見銀山世界遺産センター
 報告：中田健一「大谷地区発掘調査報告」
 岩橋孝典「豊栄神社石造物調査報告」
 伊藤徳広「松江城下町遺跡白濁地区の発掘調査」
 鳥越俊行「古丁銀分析」
 渡部麻生「国内鉱山比較研究」
 清水佳那子「近世後期の温泉津における生業と文化—「天保五年 諸日記」を素材として」
 持田直人「美郷町定徳寺の調査」
 井上雅仁「石見銀山周辺の山野の利用」

客員研究員：乗岡、西尾、鳥越
 指導者：大橋、井上、中西
 県市職員：間野、岩橋、渡部、倉恒、清水、中田、
 山手、矢部、清水、遠藤、八幡、新川、
 尾村、大野（邑南町）、持田（江津市）

【調査指導会】

第1回

「仁摩町神畑の石切場」について
 日時：5月24日
 場所：大田市仁摩町神畑ほか
 指導者：中村唯史
 参加者：間野、渡部、山手

第2回

「温泉津町、仁摩町宅野・大田、大田市五十猛町の石造物・石垣の石材」について
 日時：10月17日
 場所：大田市五十猛町ほか
 指導者：中村唯史
 参加者：間野、矢部、新川、尾村

第3回

「仁摩町神畑の石切場」について
 日時：11月1日
 場所：大田市仁摩町神畑ほか
 指導者：中村唯史
 参加者：間野、倉恒、岩橋、生田、清水、矢部、和田



神畑石切場の踏査状況

第4回

「中世温泉津及び周辺港の立地と景観」について
 日時：11月22日・23日
 場所：世界遺産センターおよび温泉津地区
 指導者：山村亜希
 参加者：間野、岩橋

第5回

「大田市内各所の石造物・石垣の石材」について
 日時：2月21日
 場所：石見銀山世界遺産センター及び各石造物所在地
 指導者：中村唯史
 参加者：間野、岩橋、渡部、新川、尾村

第6回

「大田市内の石造物」について
 日時：3月15日・16日
 指導者：佐藤聖聖
 参加者：間野、岩橋、渡部、中田、山手、新川、
 尾村、盆子原、持田、林、伊藤、廣江

第7回

「温泉津地区・大森地区出土の瓦質土器・備前焼」について
 日時：3月16日

指導者：佐藤聖聖、乗岡実、西尾克己

参加者：開野、岩橋、伊藤、廣江、山手、新川、尾村



調査指導の状況

【部会】

考古部会 9月10日実施

「仁摩地区の石垣調査のための現地検討会」

場 所：石見銀山世界遺産センター及び各石垣所在地

指導者：乗岡実、西尾克己

参加者：開野、新川、尾村、持田

(鳥根県：岩橋孝典)

(3) 東アジア鉱山の比較研究

当事業は、石見銀山遺跡の特色を明らかにするために、東アジアに所在する各鉱山との比較研究を行うものである。研究の枠組みとして、鳥根県内の鉱山、日本国内の鉱山、東アジアの鉱山の3段階に区分して調査研究を行っている。

平成29年度からの東アジア鉱山比較研究では、東アジアに限定せず、同時代の世界各地の鉱山について国内の研究者から情報を収集し、石見銀山との比較が可能な研究項目の抽出を行って比較研究を進めることにした。

国内鉱山の比較研究は、令和2年度から国内鉱山の道具の比較研究を開始している。石見銀山からの技術伝播が指摘されている佐渡金鉱山と生野銀山を対象とし、令和2年度から各鉱山の鉱山道具の集成を開始している。道具の比較は出土品と伝世史料、民俗資料をはじめ絵画資料に描かれた道具の集成を

行っている。

10月14日の客員検討会では渡部浩二氏より佐渡金鉱山の鉱山道具に関する文献・絵画史料について、植田恵美子氏より生野銀山の鉱山道具について報告いただいた。3月13日には石見銀山で出土した鉱山道具について山手貴生氏より報告があった。

海外鉱山の比較研究は、令和3年度からボリビア、トルコなどの海外鉱山との比較研究を行うこととし、令和4年度は3月24日に客員検討会をオンライン形式で開催した。

今回は、真鍋周三氏（兵庫県立大学名誉教授）に本誌12号ご投稿いただいた論文「植民地時代前半期におけるボトン銀山の周辺部社会と銀鉱業運営の実態」の内容に関して討議するとともに、津村眞輝子氏（古代オリエント博物館研究部長）から「古代西アジア・地中海域の灰吹法」と題してご報告いただいた。（鳥根県：渡部麻生・倉恒康一）

4. 各種会議の開催状況

(1) 石見銀山遺跡調査整備活用委員会

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」では、学術的調査や整備・活用のあり方などについて、「石見銀山遺跡調査整備活用委員会」を設置して、各分野の専門家から指導助言を受けている。

委員会の構成は以下のとおりである。

（調査整備活用委員会）

太田 洋子（熊谷家住宅 家の女たち前代表）

大矢 敬子（鳥根県国民保険団体連合会常務理事）

川口 純（DOWA ホールディングス（株）執行役員）

菊谷 勇雅（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）

黒田 乃生（筑波大学芸術系教授）

佐々木 愛（鳥根大学法文学部教授）

田辺 征夫（（公財）元興寺文化財研究所所長）

津村眞輝子（（公財）古代オリエント博物館研究部長）

内藤ユミヤザル（日本イコモス国内委員会理事）

仲野 義文（石見銀山資料館館長）
 中村 哲郎（中村ブレイス（株）専務）
 松村 恵司（奈良文化財研究所前所長）

第8回調査整備活用委員会

令和4年度の委員会については、以下のとおり開催した。

令和5年3月9日（木）に石見銀山世界遺産センターで開催した。出席委員は大矢敬子、苅谷勇雅、黒田乃生、佐々木愛、田邊征夫、津村眞輝子、内藤ユミイザベル、仲野義文、中村哲郎の9名であった。また、文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室から鈴木地平文化財調査官、田中祐樹研修生の参加があった。

9日午前中には、大谷地区発掘調査現場で近世後期の大規模な製錬所跡の調査状況の視察を行った。大森の町並みでは、古民家の活用事例として、まちなみ交流図書館（旧松原家）の整備状況を視察した。



大谷地区発掘調査現場の視察状況

会議では、鈴木文化財調査官から近年の世界遺産をめぐる状況について報告があり、①佐渡金山の推薦書提出と最近の進捗状況について、②ロシアのウクライナ侵攻に伴う、ユネスコ及び世界遺産委員会の対応、③近年のHIA（遺跡影響評価）の在り方について、④世界遺産におけるSDGsの在り方、特に持続可能な遺跡保護について取り上げられた。

調査研究に関する議題では、海外鉱山比較研究の取り組みについて議題となった。アジアや南米など石見銀山と比較すべき海岸鉱山の調査研究は概して低調であり、国外からアプローチしにくい環境にあ

る。このため、日本国内の鉱山間での研究ネットワークを強化して各々が有する国内・海外鉱山の情報を共有して効率的な研究を行う方法が示唆された。石見銀山での海外鉱山比較研究では常に頭を悩まされる課題について、調査研究の方向性、可能性について教示を得た。

整備活用の面では、世界遺産内での民間図書館や保育園などの活動が文化的景観を保全しながら遺跡を活用するモデルとして高評価を得た。なお、太陽光発電や風力発電の新規設置に伴うHIAはこれから急速に増加する可能性があることを示唆された。

広大な世界遺産を全て均等に管理することは困難であることから、ブロック分けをして見せる部分とそうでない部分を分ける手法も提示された。

現在既に表出している課題と今後想定される課題についていかに取り組むべきか、他の世界遺産や史跡の事例を参考にしつつ、石見銀山特有の課題にも対応する視野を持つことが大切であろう。

（島根県：岩橋孝典）

（2）石見銀山遺跡保存管理委員会

令和4年度は未開催。

（3）石見銀山遺跡景観保全審議会

令和4年度は、議題となる開発等が無かったため未開催。

石見銀山景観保全審議会 委員名簿

	氏名	住所	区分	備考
1	黒田 乃生	茨城県	学識経験者	会長
2	林 秀司	浜田市	学識経験者	副会長
3	周藤 将司	松江市	学識経験者	
4	板倉 裕司	島根県	関係行政機関	
5	津森 仁	島根県	関係行政機関	
6	尾村 七恵	大森町	地元代表者	
7	高橋 泰子	大田町	地元代表者	
8	常松 育夫	仁摩町	地元代表者	
9	友村 光男	温泉津町	地元代表者	
10	福田 満幸	大森町	地元代表者	
11	山下 幸弘	大森町	地元代表者	
12	渡邊 元文	島井町	地元代表者	

※任期 令和2年4月1日から令和4年3月31日

(4) 石見銀山遺跡整備検討委員会

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため未開催。

委員を招聘した個別調査指導会を以下のとおり実施した。

日 時：令和5年1月23日（月）

指 導 者：村田信夫

指導事項：佐見光山神社周辺見学道の路盤整備
紺屋間歩上落石対策工事計画について
柑子谷の鉱山労働者社宅の活用について
石見銀山遺跡保存活用計画の策定
西本寺整備事業の施工監理について

日 時：令和5年3月14日（火）

指 導 者：腰原幹雄

指導事項：佐見光山神社周辺見学道の路盤整備
柑子谷の長屋の活用について
柑子谷の鉱山労働者社宅の活用について
石見銀山遺跡保存活用計画の策定
(大田市：矢部俊一)

(5) 石見銀山官民協議会議

石見銀山遺跡官民連絡会議

- 第1回 令和4年3月14日
- 第2回 令和4年5月25日
- 第3回 令和4年8月25日
- 第4回 令和4年9月28日
- 第5回 令和4年12月22日
- 第6回 令和5年1月26日
- 第7回 令和5年3月14日

第12回定時総会

令和4年6月16日

クリーン銀山

令和4年10月15日

5. 調査研究成果の公表

島根県と大田市では講座や講演会を開催して、調査研究の公表を行っている。

(1) 島根県

【島根の世界遺産講座（オンデマンド）】

(1) 「中世日本海の流通と港町温泉津」

講 師：仁木 宏氏

(大阪公立大学大学院文学研究科教授)

内 容：全3部、温泉津紹介

- 第1部 室町・戦国時代の日本海西部海運と東アジア海域
- 第2部 温泉津の都市構造
- 第3部 石見銀山と温泉津をめぐる毛利氏の活動

配信期間：令和4年9月30日（金）～
令和5年1月31日（火）

申 込 数：879件（1004人）



仁木宏先生講座のチラシ

(2) 「戦国武将が欲しかった石見銀山」

講 師：小和田哲男氏（静岡大学名誉教授）

内 容：全3部

- 第1部 戦国史上の石見銀山
- 第2部 石見銀山をめぐる三つ巴の争い
- 第3部 山吹城の戦い

配信期間：令和4年10月1日（土）～
令和5年3月31日（金）

申 込 数：1420件



小和田哲男先生講座のチラシ

【特別講座「中世温泉津と戦国武将」】

日付/会場: 令和4年11月27日(日)/

温泉津まちづくりセンターホール

講座1「不言城主・吉川経家 ～そのルーツと

銀山との関わり～」倉恒康一

講座2「戦国武将と連歌 ～温泉津に残した細

川幽斎の連歌の背景～」川島美美子

(山陰万葉を歩く会会長)

主 催: 温泉津町歴史文化研究会、

鳥根県教育委員会

共 催: 大田市教育委員会、山陰万葉を歩く会

参加者数: 79人

【特別講座「山城・歴史講演会 IN 川本」】

日付/会場: 令和5年2月25日(土)/

悠邑ふるさと会館マルチホール

講座1「丸山城と石見小笠原氏」森口正和

講座2「石見小笠原氏と銀山」倉恒康一

主 催: 川本の山城を守り活かす会

共 催: 鳥根県教育委員会

参加者数: 120人

【ワークショップ】

「ミニ石見銀山絵巻を作ろう!」

日 時: 令和5年1月21日 午前・午後各1回

場 所: 鳥根県立図書館集会所(松江市内中原町)

参加者: 10名

内 容: 鳥根県立図書館ロビーでのパネル展にあわせて、「大森銀山図解」のミニチュアを制作するワークショップを開催した。開催にあたっては、中村俊郎氏及び一般社団法人石見銀山なかむら文庫から多大なご高配を賜った。記して謝意を表したい。

(鳥根県: 倉恒康一)

【パネル展】

石見銀山遺跡世界遺産登録15周年記念企画展「銀の鳥とゆのつ」と連動させ、テーマ別研究「港町温泉津の景観と変遷」での成果を中心に紹介するパネル1組を新製し、既存のパネル・タペストリーと組み合わせで7会場で展示した。

内容: 石見銀山の銀の積出港として栄えた温泉津に関する近年の調査研究成果を発表

(1) 萩・石見空港(鳥根県益田市内田町1597)

期間: 令和4年8月10日(水)～9月2日(金)

場所: 萩・石見空港ターミナルビル1階到着ロビー

(2) しまね海洋館アクアス(鳥根県浜田市久代町1117番地2)

期間: 令和4年9月9日(金)～10月11日(火)

場所: しまね海洋館アクアス 3階展望デッキ

(3) 荒神谷博物館(鳥根県出雲市斐川町神庭873-8)

期間: 令和4年10月23日(日)～10月28日(金)

場所: 荒神谷博物館交流学習室前ロビー

(4) 鳥根県立男女共同参画センターあすてらす

(鳥根県大田市大田町大田1236-4)

期間: 令和4年11月20日(日)

場所: あすてらすホール前ロビー

(5) 温泉津まちづくりセンター

(鳥根県大田市温泉津町小浜1486)

期間: 令和4年11月27日(日)

場所: 温泉津まちづくりセンター ホール

(6) 鳥根県立図書館(鳥根県松江市内中原町52)

期間: 令和5年1月5日(木)～2月1日(水)

場所: 鳥根県立図書館1階展示コーナー

(7) 悠邑ふるさと会館(鳥根県川本町川本332-15)

期間：令和5年2月25日（土）

場所：悠邑ふるさと会館マルチホール

（島根県：倉恒康一）

【日比谷しまね館イベント】

日比谷しまね館

主催：島根県

協力：大田市

開催日：令和4年7月9日（金）～7月10日（土）

会場：日比谷しまね館（東京都千代田区有楽町1丁目2-2日比谷シャンテ地下1階）

概要：石見銀山の世界遺産登録15周年を記念した大田市フェアが開催され、体験イベント「丁銀レプリカにさわってみよう！」を実施した。島根県立古代出雲歴史博物館が所蔵する「御取納丁銀」は、16世紀後半に毛利元就がつくらせた朝廷への献上品で、その控えとして現存する唯一のもの。そのレプリカを特別展示し、来場者に実際に手に持ってその大きさや重さを体感してもらった。

（島根県：渡部麻生）

【3館連携企画展】

「世界遺産登録15周年記念企画展

銀の島とゆのつ 出で湯と銀と港町」

主催：島根県教育委員会、大田市、大田市教育委員会、NPO法人石見銀山資料館

協力：一般社団法人大田市観光協会

展示期間：令和4年9月29日（木）～11月28日（月）

会場：石見銀山世界遺産センター第3展示室、いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）、ゆう・ゆう館

【第1会場】

（場所）世界遺産センター第3展示室

（担当）島根県教育委員会（世界遺産室）

（概要）石見銀山の物流拠点だった国際貿易港温泉津をグローバルな視点で紹介する。

【第2会場】

（場所）いも代官ミュージアム

（担当）NPO法人石見銀山資料館

（概要）温泉津の歴史の変遷を港と温泉という二つの視点から紹介する。

【第3会場】

（場所）ゆう・ゆう館（第3会場）

（担当）大田市（石見銀山課）

（概要）温泉津の魅力を支・温泉・流通の視点を通じて再発見していく。

その他：温泉津の歴史を解説するパンフレット「銀の島とゆのつ」を作成し、本企画展会場にて無償配布した。

概要：16世紀の大航海時代に石見銀を通じて日本と世界が「つながる」。その中で日本の玄関口のひとつが石見銀山の銀の積み出し港として繁栄した温泉津。17世紀に銀の輸送が陸路に変更された後も、北前船の寄港地として、あるいは多くの人々に愛される湯治場として、温泉津の歴史は「つむがれ」続けた。

本展覧会では、時代によってさまざまな様子を見せた温泉津について、グローバル・グローバルな視点に立って紹介し、そのユニークな歴史を、地域住民・訪問客そして次世代へ「つたえ」ることをテーマとした。



企画展チラシ（表・裏）

【センター展示室での企画展等】

【国重要文化財・辻が花染丁子文道服の再現品】展示

主 催：大田市

展示期間：令和4年4月1日(金)～5月23日(月)

令和4年6月29日(水)～

令和5年1月24日(火)

令和5年2月22日(水)～3月31日(金)

会 場：世界遺産センター第2展示室

概 要：清水寺（大田市大森町）が所蔵（京都国立博物館保管）している、辻が花丁子文道服の再現品を期間限定で展示公開した。この再現品は、専門組織（株式会社染技連・京都市）が専門家の監修のもと、約1年をかけて制作したものだ。

(大田市：山手貴生)

【センター情報コーナー展示 県市共催】

企画展 大森小学校の貴重な標本展

主 催：鳥根県・大田市

協 力：大田市立大森小学校、
中村唯史(三瓶自然館サヒメル学芸員)

展示期間：令和4年7月2日(土)～8月29日(月)

会 場：世界遺産センター情報コーナー

概 要：開校150年を迎えた大森小学校で長い間保管されてきた鉱物等の標本2点を展示公開した。1点目は中国北東部にある旧満洲撫順炭鉱の石炭関連標本（大田市立大森小学校所蔵）で、当時日本が経営した炭鉱から採取されたと思われる石炭も含まれる。2点目は100年前に休山した大森鉱山（石見銀山）で採取された鉱石等の標本（大田市教育委員会所蔵）。

企画展 海外の鉱山写真パネル展

主 催：鳥根県・大田市

展示期間：令和4年7月2日(土)～9月26日(月)

会 場：世界遺産センター情報コーナー

概 要：ポーランドの世界遺産「タルノフスキェ・グルイの鉛・銀・亜鉛鉱山とその地下管理システム」の世界遺産登録5周年を記念して石見銀山と連携事業の提案があり、お互いに写真展を開催した。併せて、石見銀山世界遺産センターが連携を目指す台湾新北市の黄金博物館に関連する金瓜石鉱山を紹介した。

銀の島とゆのつ間連ミニ展示 「福を招く～温泉津で出土した吉祥文様のやきもの一展」

主 催：大田市

協 力：鳥根県

展示期間：令和4年8月31日(水)～11月28日(月)

会 場：世界遺産センター情報コーナー

概 要：世界遺産登録15周年を祝う意味も込めて、温泉津の発掘調査で出土した数多くの陶磁器類の中から、「福」の字や「蝙蝠」、「富貴佳器」などのおめでたいモチーフや銘が描かれたものを取り上げて展示した。

(鳥根県：渡部麻生)

【石見銀山教育旅行事前学習 出前講座】

石見銀山世界遺産センターに教育旅行で訪れる学校団体に向けて事前学習を行い、世界遺産石見銀山遺跡への興味を高めるとともに、世界遺産の意味や石見銀山遺跡の歴史・価値を学ぶことで、実際に訪れた際に理解を深め、学びを得てもらうことを目的としている。

募集方法：前年度来館実績及び今年度来館予定の県内小学校へ、資料を添付のうえメールで一斉周知した。

実 施：4校 150名（児童のみ）

①出雲市立国富小学校

6月2日 33名

②奥出雲町仁多城連合修学旅行団

6月16日、9月6日 50名

③雲南市立斐伊小学校

9月2日 26名

④松江市立古江小学校

9月21日 41名

実施内容：(座学) 世界遺産について、石見銀山について(体験) 銀鉱石にふれる、銀貨幣にふれる

(鳥根県：渡部麻生)

(2) 大田市

①大田市・大田市教育委員会、NPO 法人石見銀山協働会議の主催により、次の三つの事業を行った。

(I) 世界遺産登録記念事業

日 時：令和4年7月3日(日)

会 場：大田市民会館大ホール

参加者：約250人

第一部：講演会

「世界に届ける思いやりの精神～「いも殿さま」井戸平左衛門の遺したもの～」土橋章宏氏

第二部：パネルディスカッション

「持続可能な石見銀山に向けて」

パネラー：松葉大吉、仲野義文、

中村唯史、横野弘和

コメンテーター：下間久美子

司会：津森仁

(II) 世界遺産登録15周年フォーラム「地域資源を活かす協働のカタチと可能性」

日 時：令和4年9月4日(日)

会 場：大田市民会館中ホール

参加者：約100名

講 演：「まちを元気にする協働のアイデア 旧蒔田家附風町屋群の事例から」津山市観光文化部歴史まちづくり推進室・廣瀬幸子

冊 談：「地域資源を活かす公民学連携と協働の可能性」

廣瀬幸子、平岡正宏(津山市観光文化部文化課長)、久保田典男(鳥根

県立大学地域政策学部教授) 司会・中村唯史

(III) 世界遺産登録15周年記念講演会～未来へつなぐ石見銀山の価値と魅力～

日 時：令和4年11月20日(日)

会 場：鳥根県立男女共同参画センター

あすてらすホール

参加者：約100名

講 演：「世界遺産としての石見銀山～その今日的意義～」近藤誠一(元文化庁長官)

②石見銀山学講座「ここまでわかった石見銀山」を2年ぶりに開催した。

発掘調査事業では、現地説明会を開催したほか、あらたな取り組みとして現地説明会の動画配信もおこなっている。重要伝統的建造物群保存地区区内で実施している建造物保存工事の現地公開をおこなった。

【発掘調査現場の公開】

史跡石見銀山遺跡の大谷地区発掘調査現場および豊栄神社石造物調査現場

日 時：令和4年11月13日(日)

参加者：200名

【保存修理現場の公開】

重伝建大森地区

県指定史跡石見銀山御料郷宿田儀屋遺宅青山家

日時：11月14日

③古文書講座を開催した

【古文書講座】

石見銀山世界遺産センターでは、市民向け教養講座として大田市主催の古文書講座を毎月開催している。上級・中級・初級の3コースで構成されており、各コース毎月1回開講している。中級・初級各コースの講師は大田市職員が対応している(上級コースは参加者による自主的な運営がなされている)。

上級コースは受講生のためのサロン形式で、石見銀山に関する江戸時代の概説書を輪読しました。

参加者は初級コース18名、中級コース9名、上級コース5名。

④海外鉱山との交流について

【ポーランドの世界遺産との交流】

登録5周年を迎えたポーランドの世界遺産「タルノフスキエ・グルイの鉛・銀・亜鉛鉱山とその地下水管理システム」との交流も行った。「タルノフスキエ・グルイ」は、石見銀山とほぼ同じ時期に稼働し、16世紀の国際貿易の発展とヨーロッパ経済に大きな影響を与えた。

7月には、ポーランドではタルノフスキエ・グルイ郷土愛好協会を中心に登録5周年イベントが開催され、石見銀山遺跡の写真展が行われた。同会からは、それぞれの世界遺産登録の周年事業を祝い合い、今後の交流を図るための「お祝い状」の交換が提案され、大田市からもお祝い状を送付した。

(大田市：山手貴生)

石見銀山遺跡世界遺産登録15周年記念事業一覧

イベント名や目的等に「石見銀山世界遺産登録15周年記念」の記載のある事業の一覧

No.	事業・イベント等	主催等	日程・期間	会場	内容
1	オリジナルフレーム切手「石見銀山」販売	日本郵便株式会社 国営公社	4月22日(金) ～	大田市、江津市、川本町、美郷町、邑南町の全郵便局	石見銀山を題材にしたオリジナルフレーム切手の販売
2	15周年観光イベント支援事業補助金	大田市	5月18日(水) ～1月31日(火)		県内外から大田市への観光誘客を促進させることを目的とした事業開催に対する補助金
3	ミニ企画「丁銀と古地図からたどる銀の島」	県立古代出雲歴史博物館	5月18日(水) ～8月1日(日)	県立古代出雲歴史博物館	石見銀山関連コレクションのうち銀貨幣(丁銀)、西洋の古地図などを展示。
4	しまねっこが石見銀山世界遺産センターを紹介	高根県	6月3日(金)	しまねっこ Facebook、インスタグラム、Twitter、TikTok	しまねっこが世界遺産センターと15周年を紹介
5	石見銀山世界遺産登録15周年記念コンサート	コンサート実行委員会	6月26日(日) 13:30～15:00	道の駅こいせ仁摩	オペラ「石見銀山」龍蛇役「松浦賢」さん、大原神楽社中、オペラ石見銀山合唱団が出演。
6	「石見銀山学ことはじめM～銀の巻～」発刊	大田市	7月1日(金)		石見銀山概説書「石見銀山学ことはじめ」シリーズの最新刊発売開始
7	大森郵便局開局150年企画展	石見銀山資料館	7月1日(金) ～8月29日(月)	熊谷家	開局150年を迎える大森郵便局に関する企画展
8	有料施設無料開放	石見銀山資料館	7月2日(土)	熊谷家、田河島家、龍源寺開歩	無料開放
9	世界遺産登録15周年記念特別ガイド	石見銀山ガイドの会	7月2日(土)	大森町、温泉津町	大森町町並み、龍源寺開歩に、特別に温泉津を加えた3コースのウォーキングガイドを無料化
10	「御城印」「武將印」販売	大田市観光協会	7月2日(土) ～	観光案内所(大森、温泉津、大田市駅)、務蔵寺	世界遺産登録15周年版×6種、通常版×8種、武將印の販売
11	近藤夏子 LIVE in オペラハウス大森座	石見銀山クロニクル	7月2日(土) 14:45～	石見銀山世界遺産センター、オペラハウス大森座	大田市出身シンガーソングライター近藤夏子ライブを開催
12	ノスタルジックビアガーデン in ゆのつ	ゆのつ組	7月2日(土) 17:00～21:00	スーパーおがわ駐車場～温泉津温泉街	町全体を巻き込んだビアガーデン、温泉まつり、夜神楽公演を合わせたイベント
13	展示室無料開放	世界遺産センター	7月2日(土)	世界遺産センター	無料開放
14	バス体験、銀探し、丁銀ストラップづくり他	世界遺産センター	7月2日(土) ～7月3日(日)	世界遺産センター	多くの体験メニューと飲食店舗
15	鉱石を触ってみよう!	高根県、大田市、世界遺産センター	7月2日(土) ～7月3日(日)	世界遺産センター	石見銀山世界遺産センターにある鉱石を実際に触ることができるイベント
16	センター七夕飾り	世界遺産センター	7月2日(土) ～8月7日(日)	世界遺産センター	センターロビーに七夕飾りを設置し、来場者が飾り付ける
17	石見銀山世界遺産登録×WATOWA	WATOWA	7月2日(土) ～7月3日(日)	WATOWA 駐車場	飲食店や物販店が出演
18	歴史ロマン謎解き(温泉津編) part 1	高根県教育委員会	7月2日(土) ～7月3日(日)	温泉津町内	謎解きをしながら温泉津の歴史や文化を理解する問題型・街歩き型のイベント
19	ゆうゆう館特別パネル展	高根県教育委員会	7月2日(土) ～7月3日(日)	温泉津町 ゆうゆう館	1階に石見銀山、温泉津津等を紹介する既存パネルを10枚設置
20	海外の鉱山写真パネル展	高根県、大田市	7月2日(土) ～8月29日(月)	世界遺産センター	ことし世界遺産登録15周年を迎えたポーランドのタルノ瓦斯キエ・ダルクイなど、海外の鉱山をパネルで紹介
21	開校150周年記念大森小標本展	高根県、大田市	7月2日(土) ～8月29日(月)	世界遺産センター	①田溝西撫順炭鉱の石炭関連標本、②大森鉱山の鉱石などの標本
22	めざせ! 銀山王 石見銀山発見クイズ	石見銀山協働会議	7月2日(土) ～9月30日(金)	web 開催	小学生が回答可能な石見銀山に関するクイズをwebで公開、抽選で景品プレゼント
23	石見銀山遺跡世界遺産登録15周年記念事業	大田市	7月3日(日) 13:00～16:30	大田市民会館(大ホール)	(いも殿さま著者)土橋章宏氏講演会、パネルディスカッション

石見銀山遺跡世界遺産登録15周年記念事業一覧

イベント名や目的等に「石見銀山世界遺産登録15周年記念」の記載のある事業の一覧

No.	事業・イベント等	主催等	日程・期間	会場	内容
24	石見銀山世界遺産登録15周年記念大田市フェア in 日比谷しまね館	高根県(東京事務所)	7月5日(火) ～7月14日(水)	日比谷しまね館	特産品販売のほか、9日・10日は「丁銀レプリカにさわってみよう!」を実施。
25	月イチガク 墓場放浪記 ～石塔から探る石見の歴史～	さんべ縄文の森ミュージアム	7月9日(土)	さんべ縄文の森ミュージアム	岡野大系主席研究員による石見の石造物に関する講演
26	島根ふるさとフェア2022 ～しまねの夏を満喫～	大田市	7月16日(土) ～7月17日(日)	イオンモール広島南中	大久保剛歩 VR 体験
27	地形と地質をめぐるまじあるき	大田市	7月23日(土)	仁摩町琴ヶ浜海岸	
28	世界遺産センター「VR 銀山シアター」に新コンテンツ映像<第5弾>	大田市	7月27日(水) ～	世界遺産センター	釜屋剛歩と岩盤加工道構、大露頭掘削を迫力あるドローン映像で見渡す!
29	15周年フォーラム	協働会議、大田市	9月4日(日)	大田市市民会館 中ホール	津山市事例報告、公民学連携と協働の可能性(討議)
30	琴ヶ浜サンセットライブ2022	実行委員会	9月10日(土)	琴ヶ浜	大田市補助事業。グルメフェス、ミュージックフェス。
31	白銀の舞神楽大会	石見銀山神楽連盟	9月23日(金) 秋分の日	道の駅こいせ仁摩	土江子ども神楽団、瀬戸高校石見神楽部など6社中の神楽公演
32	記念企画展 銀の鳥とゆのつ	高根県教育委員会、大田市、大田市教育委員会、銀山資料館	9月29日 ～11月28日	世界遺産センター、いも代官ミュージアム、ゆう・ゆう館	「東アジア海路の玄関」「津から温泉へ」「温泉力文化力」
33	銀の鳥とゆのつ スタンプラリー	高根県、大田市、銀山資料館	9月29日 ～11月28日	世界遺産センター、いも代官ミュージアム、ゆう・ゆう館	抽選で15名に記念品を贈呈
34	歴史ロマン謎解き(温泉津編) part 2	世界遺産センター	9月29日 ～11月28日	温泉津町内	謎解きをしながらか温泉津の歴史や文化を理解する周遊型・街歩き型のイベント
35	オンデマンド講座	高根県教育委員会	9月30日(金) ～1月31日(火)	YouTube 配信	「中世日本海の流通と廻町温泉津」 仁本宏
36	オンデマンド講座	高根県教育委員会	10月1日(土) ～3月31日(金)	YouTube 配信	「戦国武将が欲しがった石見銀山」 小和田哲男
37	クリーン石見銀山2022	協働会議	10月15日(土)	世界遺産センター	遊歩道の除草、竹の処理などの軽作業
38	旅する一皿2022	実行委員会	10月29日(土) ・30日(日)	大森町内	全国の著名な料理人が創作料理を提供
39	新商品販売開始 洋菓子フィナンシェ	ボンボンボーヤージュ(大田市)	11月1日(火)	ボンボンボーヤージュ(大田市)	銀の延べ棒をイメージした長方形のフィナンシェ。商品名は銀鉱山王国を表す「ラ・アスミナスグラフ」。
40	オペラ「石見銀山」関西公演	実行委員会	11月2日(水)	京都劇場	神屋寿雄や於紅孫右衛門ほか石見銀山に生きた男女の深い悲恋の物語
41	現地説明会 ここまでわかった石見銀山	高根県教育委員会、大田市	11月13日(水)	豊栄神社、大谷地区発掘現場	高根県及び大田市職員による調査成果の現地説明会
42	世界遺産登録15周年記念講演会～未来へつなぐ石見銀山の価値と魅力～	協働会議、大田市	11月20日(日) 13:00～16:00	あすてらすホール	「世界遺産としての石見銀山～その今日的意義～」 近藤誠一
43	特別講座 in 温泉津	高根県教育委員会、温泉津町歴史文化研究会	11月27日(日) 13:30～15:45	温泉津まちづくりセンターホール	中世温泉津と戦国武将 (1) 不言城主・吉川経家 (2) 戦国武将と連歌
44	県立図書館ワークショップ	高根県教育委員会	1月21日(日)	県立図書館	ミニ石見銀山絵巻を作ろう
45	月イチガク 講座「中世益田と石見銀山」	さんべ縄文の森ミュージアム	2月4日(土)	さんべ縄文の森ミュージアム	中世益田と石見銀山をテーマにした講座
46	山城・歴史講演会 in 川本	川本の山城を守り活かす会	2月25日(土)	悠悠ふるさと会館 マルチホール	中世川本と石見銀山 (1) 丸山城と石見小笠原氏 (2) 石見小笠原氏と銀山

資料 1. 石見銀山入込客数の推移

年度	施設別入館者実数							入込客数公表値		備考
	龍潭寺 開歩	石見銀山 資料館	世界遺産 センター	大久保開歩 ツアー	田河島家	熊谷家 住宅	施設実数 合計	(大田市観光振興課)		
H7	28,037	41,994					70,031	250,000		
8	28,440	42,276					70,716	260,000		
9	34,832	48,081			2,449		85,362	300,000		
10	34,410	39,257			1,615		75,282	280,000		
11	26,690	29,246			1,485		57,421	260,000		
12	30,590	33,832			1,589		66,011	280,000		
13	34,701	30,308			2,882		67,891	300,000	暫定リスト搭載	
14	36,464	27,729			2,628		66,821	290,000		
15	40,279	27,441			2,844		70,564	310,000		
16	42,652	26,990			2,437		72,079	318,000		
17	56,567	31,561			3,313		91,441	340,000		
18	95,260	37,730			12,287	38,340	183,617	400,000		
19	363,152	131,866	81,501		36,997	59,085	672,601	713,700	世界遺産登録	
20	363,814	104,878	193,781		40,837	50,520	753,830	813,200		
21	239,129	53,603	182,002		14,498	17,684	506,916	560,200		
22	196,495	35,928	129,613		10,698	13,712	386,446	504,800		
23	192,516	36,241	128,416	7,517	15,892	19,369	399,951	498,700		
24	150,529	33,148	110,291	6,808	17,415	20,972	339,163	432,200	登録5周年	
25	186,089	32,941	107,667	6,543	16,346	20,525	370,111	511,600		
26	149,143	27,503	97,232	6,243	12,705	16,565	309,391	437,100		
27	121,153	23,264	87,811	5,448	11,456	15,721	264,853	375,600		
28	101,607	16,485	79,954	4,816	7,328	11,116	221,306	313,600		
29	105,723	23,472	76,100	5,270	7,311	11,627	229,503	324,800	登録10周年	
30	79,502	15,365	58,921	452	5,079	11,420	170,739	246,300		
31	84,705	14,082	64,021	4,814	4,908	11,126	183,656	265,300		
R2	57,531	7,783	42,215	2,598	3,691	7,646	121,464	171,000		
3	51,950	6,452	43,302	3,019	3,322	6,875	114,920	165,400		
4	72,214	7,635	61,640	4,400	3,930	9,285	159,104	未定	登録15周年	

資料2. 令和4年度 石見銀山世界遺産センター入館者の状況

総入館者=66,109人（プレオープンからの累計=1,563,503人 フルオープンからの累計=1,328,129人）

展示室観覧者=29,487人（フルオープンからの累計=667,669人）

展示観覧料収入=7,453,410円

1. 入館者数・展示観覧者数

*1 平成21年4月1日から外国人の展示室観覧割引制度を開始

(単位:人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入館者	3,821	9,001	3,643	4,564	9,228	6,731	8,655	7,190	2,884	1,782	2,547	6,063	66,109
展示室観覧者	1,789	3,752	1,873	1,988	3,680	2,670	3,657	3,761	1,615	911	1,199	2,592	29,487
有料観覧者	1,694	3,447	1,572	1,591	3,508	2,362	2,931	3,386	1,409	897	1,147	2,330	26,074
一般	1,241	2,724	1,036	1,206	2,592	1,645	1,984	2,403	1,057	728	871	1,691	19,167
大人	1,175	2,548	1,009	1,115	2,308	1,608	1,914	2,369	1,008	666	832	1,540	17,992
小中学生	66	176	17	90	384	37	70	34	49	62	39	151	1,175
団体	4	55	30	2	15	127	252	252	49	0	25	90	901
大人	4	55	30	2	12	127	252	249	49	0	25	90	895
小中学生	0	0	0	0	3	0	0	3	0	0	0	0	6
その他割引利用	442	652	312	376	884	586	639	709	283	144	235	506	5,768
大人	406	595	301	339	727	552	612	690	265	127	212	443	5,399
小中学生	36	57	11	37	157	34	27	19	18	17	23	63	499
外国人割引者 *1	7	16	4	8	17	4	56	22	20	25	16	43	238
無料観覧者	95	305	501	397	172	308	736	375	206	14	52	262	3,413
大人	92	143	166	94	157	171	353	179	206	13	43	128	1,745
小中学生	3	162	335	20	15	137	255	196	0	1	9	134	1,267
イベント	0	0	0	283	0	0	118	0	0	0	0	0	401

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
入館者	R4年度	3,821	9,001	3,643	4,564	9,228	6,731	8,655	7,190	2,884	1,782	2,547	6,063	66,109
	R3年度	3,028	4,931	2,433	4,534	4,736	4,122	4,874	5,816	2,520	1,297	328	4,328	42,907
	対前年度比	126.2%	182.5%	149.7%	100.7%	195.5%	163.3%	177.6%	123.6%	114.4%	140.6%	77.6%	140.1%	154.1%
展示室観覧者	R4年度	1,789	3,752	1,873	1,988	3,680	2,670	3,657	3,761	1,615	911	1,199	2,592	29,487
	R3年度	1,678	2,210	1,462	2,375	2,457	2,194	3,071	4,110	1,621	668	176	2,160	24,182
	対前年度比	106.6%	169.8%	128.1%	83.7%	149.8%	121.7%	119.1%	91.5%	99.6%	136.1%	681.2%	120.0%	121.9%

2. 展示室観覧料収入

(単位:千円)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
R4年度	486	994	403	453	953	685	842	990	407	255	331	654	7,453
R3年度	382	590	248	523	637	487	553	834	337	191	49	581	5,412
対前年度比	127.2%	168.5%	162.5%	86.6%	149.8%	140.6%	152.2%	118.7%	121.0%	133.4%	675.2%	112.4%	137.2%

(参考:外国人割引者)

地域別	R4	累計 H21/4~
東ヨーロッパ	3	145
西ヨーロッパ	36	963
北アメリカ	72	956
中南米	3	149
オセアニア	4	264
東アジア	99	5,000
東南アジア	17	573
南アジア・中央アジア	0	86
中東・アフリカ	4	112
計	238	8,278

※平成21年4月25日より電子マネー「石見銀山 WAON」サービスイン

■石見銀山 WAON とは

大田市観光協会とイオン株式会社（千葉県）が業務提携し、イオンの電子マネー「WAON」に石見銀山遺跡をデザインし「石見銀山 WAON」を発行。世界遺産センターなどの有料施設等（8カ所）での支払い時に割引金額で利用できるとともに、その売上金の一部が「石見銀山基金」に寄付され、石見銀山遺跡の保全に活用されます。

資料3. 令和4年度 大久保間歩一般公開限定ツアー入坑者数の状況

公開日：4月～11月及び、3月の金・土・日・祝日（12月～2月末日までは休場）
 8月10日（水）、8月11日（木）、8月15日（月）
 午前と午後 各2回のツアー（1日4回）

定員：各回20名（1日80名）

料金：大人 3,700円 小人 2,700円

申込先：柳石見観光 大田営業所内 大久保間歩予約センター

電話 0854-89-9091 FAX 0854-84-0751

HP <http://www.iwami.or.jp/ginzan/>

※新型コロナウイルスの影響により定員各回10名で開催。

●都道府県別 大久保間歩入坑者数

	令和4年度	令和3年度	対前年比	
	人数	人数	増減数	増減率
北海道	62	27	35	130%
青森	2	0	2	0%
岩手	3	1	2	200%
宮城	8	22	-14	-64%
秋田	4	2	2	100%
山形	3	0	3	0%
福島	13	10	3	30%
茨城	48	25	23	92%
栃木	23	10	13	130%
群馬	14	28	-14	-50%
埼玉	170	103	67	65%
千葉	203	87	116	133%
東京	839	547	292	53%
神奈川	390	231	159	69%
山梨	16	10	6	60%
新潟	14	5	9	180%
長野	22	16	6	38%
富山	12	9	3	33%
石川	26	12	14	117%
福井	21	7	14	200%
岐阜	36	29	7	24%
静岡	100	71	29	41%
愛知	337	214	123	57%
三重	41	5	36	730%

	令和4年度	令和3年度	対前年比	
	人数	人数	増減数	増減率
滋賀	44	43	1	2%
京都	105	91	14	15%
大阪	401	320	81	25%
兵庫	244	185	59	32%
奈良	38	45	-7	-16%
和歌山	18	13	5	38%
鳥取	74	86	-12	-14%
島根	256	326	-70	-21%
岡山	151	106	45	42%
広島	383	351	32	9%
山口	75	69	6	9%
徳島	20	18	2	11%
香川	49	27	22	81%
愛媛	41	36	5	14%
高知	14	5	9	180%
福岡	125	121	4	3%
佐賀	11	25	-14	-56%
長崎	9	8	1	13%
熊本	21	9	12	133%
大分	12	7	5	71%
宮崎	8	4	4	100%
鹿児島	11	4	7	175%
沖縄	5	0	5	0%
海外	4	0	4	0%
合計	4,526	3,370	1,156	34%

●月別 大久保間歩入坑者数、収入

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
R4年度	大人	334	531	302	395	506	500	585	617	0	0	0	439	4,209
	小人	48	32	12	33	101	16	12	12	0	0	0	51	317
	合計	382	563	314	428	607	516	597	629	0	0	0	490	4,526
	収入（千円）	1,365	2,051	1,150	1,551	2,145	1,893	2,197	2,315	0	0	0	1,762	16,429
R3年度	大人	289	364	167	335	343	304	469	576	0	0	0	325	3,172
	小人	19	13	4	28	43	23	13	16	0	0	0	39	198
	合計	308	377	171	363	386	327	482	592	0	0	0	364	3,370
	収入（千円）	1,121	1,382	629	1,315	1,385	1,187	1,770	2,174	0	0	0	1,308	12,271

II

令和4年度刊行の 石見銀山遺跡関連書籍・論文

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 14

1. 報告書等

- ・『石見銀山遺跡発掘調査概要30 大谷地区・岩根家地点・松原家地点』（大田市教育委員会、2023.3）
- ・『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5 港町温泉津の景観と変遷』（鳥根県教育委員会・大田市教育委員会、2023.3）
- ・『銀の鳥とゆのつ』（鳥根県教育委員会、2022.9）
- ・『石見銀山歴史文献調査報告書18 銀山師高橋家歳年中日記』（鳥根県教育委員会、2023.3）
- ・『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究13』（鳥根県教育委員会・大田市教育委員会、2023.3）

2. 関連論文

- ・村井章介「石見銀山遺跡とその文化的景観」佐藤信編『世界遺産の日本史』（筑摩書房、2022.5）
- ・原田洋一郎「鉱山跡地の景観と歴史を読む 石見銀山とその周辺」『地理』第67巻第6号（古今書院、2022.6）
- ・森田なつみ「石見銀山遺跡の観光活用に向けた一考察」『月刊考古学ジャーナル』第77号（ニューサイエンス社、2022.7）
- ・『石見銀山研究』第2号（石見銀山研究会、2022.11）
 - 長谷川博史「石見銀山と大内氏」
 - 小杉紗友美「笹ヶ谷銅山における勘場の機能—津和野町堀家文書史料調査事業の成果から—」
 - 乗岡実「石見で活躍した備前石工」
 - 鳥谷芳雄「三菱UFJ銀行貨幣・浮世絵ミュージアム所蔵のコブコインの一括資料」
 - 三上利三「大森代官所最後の動向と地域情勢—濱原村二上家日記から—」
 - 佐々木愛「遂昌金鉱国家鉱山公園」
 - 小田由美子「世界遺産登録を目指す佐渡金銀山遺跡」
 - 坪井利一郎「別子銅山—伝える、深く学ぶ、繋ぐ—」
 - 大國晴雄「銀山研究の先達 / 田中圭一・脇田晴

- 子・田中琢」
- 塩田健治「足利直冬を置った人物」
- 山手貴生「タルノフスキュ・グルイの鉛・銀・亜鉛鉱山とその地下水管理システム（ポーランド）」
- 高安克己「世界遺産に思う その1」
- 倉恒康一「井上寛司他編『中世大田・石見銀山関係史料集』、『中世川本・石見小笠原氏関係史料集』」
- 若槻真治「長尾英明著『ガイドがつづった石見銀山物語—ちよっとおさらい編』」
- ・廣嶋清志「天保飢饉と家族の損壊・再生—石見国今浦に見る—」『山陰研究』第15巻（鳥根大学法文学部山陰研究センター、2022.12）
- ・丸尾弘介、永井久美男「山口市歴史民俗資料館所蔵の古丁銀（古鑄銀錠）」『出土銭貨』第43号（出土銭貨研究会、2022.12）
- ・齋藤努、竹下聡史、反保元伸、土居内翔伍、橋本亜紀子、梅垣いづみ、久保謙哉、二宮和彦、三宅康博「負ミユオンを用いた丁銀の色付に関する非破壊分析」『文化財科学』第84巻（日本文化財科学会、2022）
- ・高橋哲也「『地域活性化』への手がかかり—石見銀山のまち 大森町のいま—」『繊維製品消費科学』第64巻第2号（日本繊維製品消費科学会、2023.2）
- ・山田明子「日貫 安原家（大森より）について」『郷土石見』第119号（石見郷土研究懇話会、2023.3）
- ・角田徳幸、中安恵一「江津市長田邸の関連資料」『古代文化研究』第31号（鳥根県古代文化センター、2023.3）
- ・熱田貴保「石見地方東部における近世・近代の瓦の生産と流通」『鳥根県古代文化センター研究論集第31集 近世近代の交通と地域社会経済』（鳥根県古代文化センター、2023.3）
- ・中安恵一「明治中後期における石見帆船の帆船経営—安濃郡波根西村・竹下家の事例から—」（同上）
- ・東森晋「石見地方の産場立地と交通の変遷」（同上）
- ・目次謙一「近世後期石東地域の陰陽交通路—温泉

津への旅日記からー」(同上)

- ・「季刊文化財 特集 石見銀山遺跡世界遺産登録15周年」第156号(鳥根県文化財愛護協会、2023.3)

津森仁「石見銀山遺跡のこれまでとこれから」
間野大丞「世界遺産登録15周年・重伝建選定35周年の取り組み」
倉恒康一「企画展「銀の島とゆのつ」」
渡邊悟「15周年を迎えての改革・革新」

3. 関連書籍

- ・長尾英明「ガイドがつづった石見銀山物語ーちょっとおさらい編ー」(山陰中央新報社、2022.2)
- ・「石見銀山学ことはじめVI」(大田市教育委員会、2022.6)
- ・千早茜「しろがねの業」(新潮社、2022.9)
- ・萩原三雄「金山業と中世の鉱山技術 甕の山の世界」(高志書院、2022.10)
- ・高橋悟「世界遺産石見銀山の五百羅漢石仏が語る 石見銀山と江戸との関わり」(オリジナル、2023.1)
- ・「大田市文化財保存活用地域計画 概要版」(大田市、2023.2)
- ・岩本廣美ほか「日本の世界遺産 地理・歴史・SDGsの視点でひも解く 原爆ドーム・厳島神社・石見銀山・明治日本の産業遺産宗像・沖ノ島・潜伏キリシタン関連遺産屋久島奄美・沖縄琉球王国グスク」(帝国書院、2023.2)
- ・「いも代官領徳碑533基全覧 第19代石見銀山領代官井戸平左衛門正明公」(大田市文化協会、2023.3)

4. その他(他鉱山)

- ・宇佐美亮「佐渡島(さど)の金山(きんざん)手工業による金生産システム」『ビオシティ』第90号(ビオシティ、2022.4)

- ・久間英樹ほか「小型軽量3次元レーザスキャナを用いた多田銀銅山青木間歩周辺の測定」『技術史教育学会誌』第23巻第2号(技術史教育学会、2022.4)
- ・清水正明「鉱物科学としての鉱床学・資源地質学の発展と将来」『地学雑誌』第131巻第2号(公益社団法人東京地学協会、2022.4)
- ・モリス ジェームズ・ハリー「明治前期の英国と足尾銅山の関係」『鉱山研究』第97号(鉱山研究会、2022.5)
- ・新田栄治「薩摩藩の金山開発とその社会」『たたら研究』第60号(たたら研究会、2022.5)
- ・宇佐美亮「近代佐渡鉱山の変遷と産業遺産」『産業考古学』第159号(産業遺産学会、2022.5)
- ・中田健一「鉱業遺産における普遍的価値と評価「佐渡島の金山」の価値」(同上)
- ・青木達也「佐渡金銀山の北沢浮遊選鉱場が示す近代化の足跡 北沢地区に浮遊選鉱法が導入されるまで」(同上)
- ・広瀬貞三「資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料(1)」」『福岡大学人文論叢』第54巻第1号(福岡大学研究推進部、2022.6)
- ・生井貞行「銅山閉山後49年の足尾町」『地理』第67巻6号(古今書院、2022.6)
- ・久間英樹ほか「佐渡金銀山大切山坑の煙貫口発見に関して」(『日本鉱業史研究』第72号、2022.6)
- ・大石徹ほか「新潟佐渡鉱山の金銀鉱石について」(同上)
- ・波部浩二「『金銀山大概書』の成立年代と類本の検討」(同上)
- ・井澤英二「佐渡金銀山の江戸時代の産金量」(同上)
- ・「三信鉱工(株) 粟代鉱業所および津具金山跡 日本鉱業史研究会2021現地見学会」(同上)
- ・竹田和夫「新潟県史「佐渡相川の歴史」の意義を考える 編纂経緯と資料編・通史における鉱山記述の分析」『新潟史学』第83号(新潟史学会、2022.7)
- ・「新徳銀山の時代 新徳銀山と考古資料からみた新徳地区 史跡佐渡金銀山遺跡追加指定記念企画

- 展」(新潟県佐渡市(観光振興部世界遺産推進課)、2022.7)
- ・梅嶋修「旧佐渡鉱山本部事務所の建築概要について」国史跡佐渡金銀山遺跡・御料局佐渡支庁跡の調査(その3)『日本建築学会北陸支部研究報告集』第65号(日本建築学会北陸支部、2022.7)
- ・梅嶋修「旧佐渡鉱山取締所の建築概要について」国史跡佐渡金銀山遺跡・御料局佐渡支庁跡の調査(その4)。(同上)
- ・牧知宏「住友本社の直営鉱山 湯之舞鉱山を中心に」『住友史料館報』第53号(住友史料館、2022.7)
- ・志賀美英「鹿兒島錫山鉱山遺構目録」(南日本新聞開発センター、2022.8)
- ・『生業絵巻尽 ひらけ!江戸の産業図鑑』(新潟県立歴史博物館、2022.9)
- ・竹内康人「佐渡鉱山と朝鮮人労働」(岩波書店、2022.10)
- ・中澤秀雄ほか「戦後日本の出発と炭鉱労働組合 夕張・笠嶋一日記1948-1984年」(御茶の水書房、2022.10)
- ・柴田知彰「小坂鉱山煙害問題をめぐる郡制期の地方自治 郡役所文書群の構造分析、郡会議事録の分析等より」『秋田近代史研究』第61号(秋田近代史研究会、2022.10)
- ・堤洋子「絵図にみる鉱山の女性労働」(同上)
- ・村尾智ほか「鹿兒島県の旧山ヶ野および永野金山における鉱石処理過程」『社会地質学シンポジウム論文集』第32巻(社会地質学会、2022.11)
- ・高嶋洋ほか「鹿兒島県旧山ヶ野・永野金山における尾鉱の人工地層」(同上)
- ・井上和道ほか「鹿兒島県旧山ヶ野金山尾鉱堆積物中水銀濃度の鉛直変動」(同上)
- ・中島和夫ほか「山ヶ野金山跡に残るズリの構成鉱物(概報)」(同上)
- ・池田善文ほか「長登銅山跡亀山遺跡の出土銭」『出土銭貨』第43号(出土銭貨研究会、2022.12)
- ・『新徳銀山の時代展・講演会資料集』(新潟県佐渡市[観光振興部]世界遺産推進課、2022.12)
- ・北風嵐ほか「山口県の金属鉱山目録」(山口大学工学部学術資料展示館、2022)
- ・寺尾美保「明治大正期の島津家鉱山経営 鉱山関係古写真の紹介」『高古集成館紀要』第21号(高古集成館、2022)
- ・三浦麻衣子ほか「戦国時代の津具鉱山の利用に関する調査概報」『帝京大学文化財研究所研究報告』(帝京大学文化財研究所、2022)
- ・澤喜友彦ほか「新潟県佐渡鉱床における金鉱化作用の鉱物学的および地球化学的研究」(『日本地質学会学術大会講演要旨』(一般社団法人日本地質学会、2022)
- ・小松美鈴ほか「鉱山史研究における3D技術活用の可能性について 湯之奥金山遺跡における活用事例」『山梨県考古学協会誌』第29号(山梨県考古学協会、2022)
- ・河合仁美ほか「北海道空知地方におけるずり山の植生回復と跡地管理の提案」『景観生態学』第27巻第1-2号(日本景観生態学会、2023.1)
- ・毛利和雄「『文明・文化をめぐる対話』か『歴史戦』か『佐渡島の金山』の世界遺産推薦をめぐって」『明日への文化財』第88号(文化財保存全国協議会、2023.1)
- ・橋本博文「『佐渡島(さど)の金山』世界遺産登録をめぐって」(同上)
- ・『多田銀銅山遺跡概観・万善地区 多田銀銅山遺跡銀山地区 多田銀銅山遺跡屏風岩地区』(猪名川町教育委員会教育振興課社会教育室、2023.3)
- ・宇佐美亮「佐渡金銀山遺跡の分布調査と鉱山絵図」『金山史研究』第15巻(甲斐黄金村・湯之奥金山博物館、2023.3)
- ・井澤英二「金山の技術と産金量 1500-1700年」(同上)
- ・熊谷暢聡「兵庫県北部の金山と金挽臼 中瀬金山を中心に」(同上)
- ・小松美鈴「金挽臼(鉱山臼)の型式分類」(同上)
- ・出月洋文「金山博物館25年の成果と課題」(同上)
- ・青木美香「多田銀銅山の採鉱跡に関する一考察」(同上)

- ・中西哲也「山梨県茅小屋金山探掘跡に見られる鉱石の特徴について」(同上)
- ・伊藤佳世「湯之奥茅小屋金山遺跡の探掘域調査」(同上)
- ・絹川貞二「金山奉行大久保長安と本地屋村田家本居宣長母の実家再考(4・最終回)」『三重の古文化』第108号(三重郷土会世務部2023.3)
- ・桑水流淳二「鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター設立記念シンポジウム報告 鉱山の鹿児島 近代化を鉱山から読み解く」『鹿児島県地学会誌』第120号(鹿児島県地学会、2023.3)
- ・松尾容孝「宝蔵文書と地籍図にみる十津川山村大字武蔵を中心に」『日本地理学会発表要旨集2023』(公益社団法人日本地理学会、2023)
- ・「斐太紀 特集 飛騨、金鉱山とその歴史」第31号(飛騨学の会、2023)
- ・星山貫一「足尾銅山の歴史と渡良瀬遊水地の存在意義」『環境と測定技術』第50巻第6号、2023)

III

石見銀山遺跡関連調査研究

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 14

島根県最古の「皇紀元」紀年銘について

—慶応三年建立の豊栄神社小鳥居—

岩橋 孝典

はじめに

島根県大田市大森町に所在する豊栄神社(長安寺)は、戦国時代に毛利元就を祀る長安寺として、毛利家重臣の林就長により建立された(日次2013)。江戸時代を通じて曹洞宗の洞春山長安寺として存続するが、寛延2(1749)年に大谷から現在の下河原に移転し、嘉永2(1849)年には失火により本堂以下が焼失した。主要な堂舎が焼失し、寺勢が衰退した状況で幕末を迎えた。

このような中、慶応2(1866)年の幕長戦争(第2次長州征伐)石州口の戦いにおいて勝利した長州藩の駐屯藩士によって、翌慶応3(1867)年に「御霊社」社殿や境内地が再建・整備された(矢野2014・2016、仲野2018)。

明治10年12月に制作された「豊栄神社現在境内絵図」によれば、当時玉垣内の拝殿周には灯笼14基と手水鉢一基、獅子狛犬一対が配置されている。また、本殿の周囲には12基の灯笼が配置されていて、門内中ノ段(灯笼2基、小鳥居1基、手水鉢1基)や参道兩脇(用水桶2基、灯笼4基、大鳥居1基、石橋1基)の石造物を合計すれば少なくとも41基の石造物が存在していたことが知られている。

豊栄神社は、石見銀山遺跡内の大森町と銀山町を繋ぐ市道銀山線の北西側に面して参道が接続している。市道に面する石造の大鳥居(跡)を過ぎ参道を進み、随神門を通過して中ノ段の参道をさらに北に進み、石造の小鳥居をくぐって5段の石段を登り、玉垣に囲繞された拝殿に至る。なお、小鳥居は昭和18年9月の台風による水害(土石流)で根本を残して折損倒壊しており、その後は再建されていない。(第1図・第2図参照)

この小鳥居については、令和3(2021)年度の境内地整備工事に伴う境内地再整備に伴って多くの破

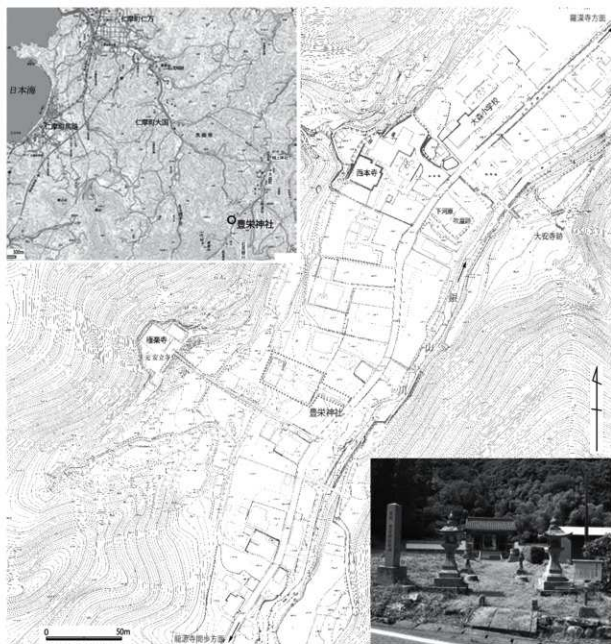
損した構成部材が再発見され、石材の再実測や銘文の記録が行われた。現況では鳥居の柱の根元から50cm程度の部分で折れており、本来の造立位置は知られるが、柱の上部や笠木の大半はこの度の調査で確認されたものである。笠木は3破片、右柱は4破片、左柱は2破片が発見され、若干未発見の部材があるものと推定されるがほぼ完形に復元することが可能である(岩橋2023)。(第3図参照)

復元総高は2.9m、笠木の幅3.6m、柱直径は0.21mである。大正十四(1925)年の「神社財産登録申請書」によれば「高さ八尺(242cm)、横五尺(151cm)」とあるが(遠藤2002)、これは鳥木下面までの高さで、両柱端間の距離とみれば整合する。石材は福光石裂である。石工は「福光石工棟梁甚四郎」の銘が刻字される。

また、慶応3年3月の「豊栄神社寄附物品姓名記簿(写)」(豊栄神社所蔵、石見銀山資料館寄託・以下「姓名記簿」と略)¹⁾との照合から、欠損部分の銘文も復元できることが明らかとなった(岩橋2023)。

ここで紹介するのは、鳥居に向かって右側の柱背面に刻まれた「皇 紀元二千五百二十七年」の文字である。文字列は長さ約41cmの間に11文字が刻字され、「皇」と「紀元…」の間は一文字程度の空白が設けられている。刻字の大きさは一文字あたり縦横3～4cmの間に収まっている。

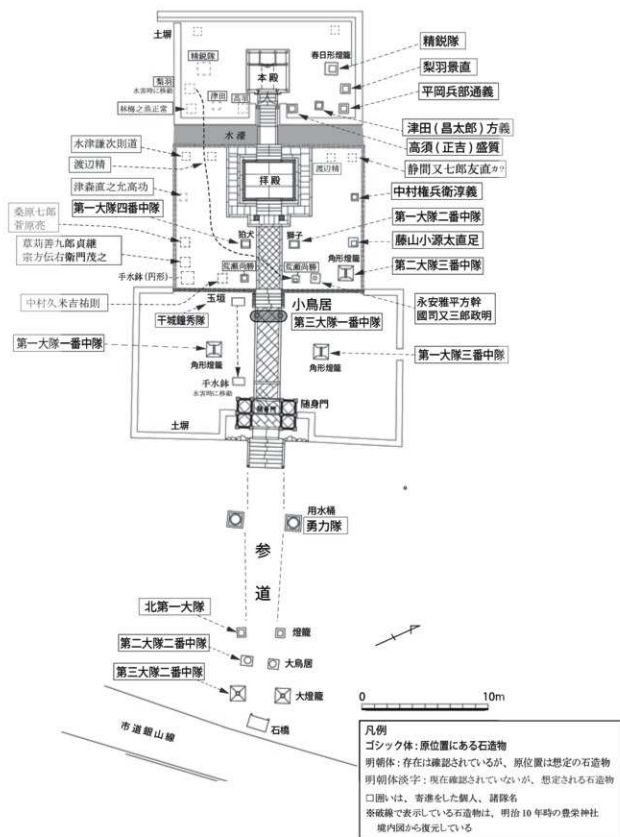
この柱石材の発見時には「皇」、「……(破損)二十七年」の文字のみ判読できた。豊栄神社の石造物は大半が慶応3年に寄進されたもので、明治6年に1基の灯笼が追加されている。このため、「…二十七年」とはいったいどのような年号なのかという疑問があった。そして調査当時は、上棟式が行われた慶応三年二月二十七日の誤記ではないかと考えたが、実際は意外な答えであった。



中之段の状況：左の上段に拝殿、中之段右手に随神門。上段に登る階段の手前に右道真原の礎元が元位置に残る（矢印の場所）

第1図 豊栄神社の位置と現況写真（左上の地図は、国土地理院HPからダウンロードしたものを改変して使用）

本殿及び拝殿周辺の土塼内・土塼内の石造物で特に注
記のないものは、石神籠である。



第2図 豊榮神社境内石造物配置図

1. 実際の紀年銘と「紀元」の歴史

「姓名記簿」では、小島居の銘文として以下の記述がある。(第3図・第4図参照)

島居

奉納

第三大隊一番中隊

中隊司令官

有志志津摩藤原行古

半隊司令官

三戸左馬介源有永

同官

伊藤源七郎源貞勝

皇紀元 二千五百貳拾七年

～以下略～

石造の小島居は、破損による欠損部分が全体の4割程度に及ぶが、残存している銘文刺字と「姓名記簿」の記載を照合すると、両者がほぼ同じ内容であることが確認された(「姓名記簿」は実際の石造物銘文を写したものでか)。これにより、破損していた柱石材に刺字されていた年号は、皇紀元二千五百二十七年=慶応三(1867)年の紀年銘であることが判明したのである。

なお、「…元二千五百…」の文字は、文字列の中央部分が推測による傷により破損しているが、文字の両端部はかろうじて遺存しており、復元が可能である。(第3図)

ここで取り扱う皇紀元・紀元・皇紀とは、すなわち「神武天皇御即位紀元」の略称であり、明治5年11月15日の太政官布告第三四二号によって初めて公布され、公式に使用されたものである。紀元・皇紀という年号は、1945年の太平洋戦争敗戦まで使用されてきたが、戦後は用いられる機会が限定される。ただし、現在でも周年の設定基準に使われるなど、その利用は廃絶しているわけではない。

さて、この「神武天皇御即位紀元(皇紀)」の考え方には前史があり、慶長5(1600)年に儒学者林鷲峯は『鷲峯林学士詩集』巻五十一、向陽後集十四

で「…神武天皇辛酉元。曆運至_二慶長庚子_一(五年)。帝王。総百有八代。二千二百六十祀。…」と記す。また、元禄年間(1694-1704)に刊行された伊藤東涯の「帝王譜略国朝記」にも「元年辛酉。丁_二周惠王十七年。魯閏公二年_一。至_二今元禄二年己巳_一。二千三百四十九年」と記されるように、江戸時代前期には儒学者などの知識人の間では既に知られたものとなっている(中山1961)。

神武天皇即位2500年にあたる天保11(1840)年に、津和野藩の国学者・大國隆正は「中興紀元」を提唱していると指摘する(中山1961、鈴木2014)。大國隆正の著作「本学挙要」、「釈或問答」(ともに安政2(1855)年)にも神武中興紀元論が記述されるが、西洋のキリスト紀元の年紀に対して日本の国体の優位性を示したものとされる。

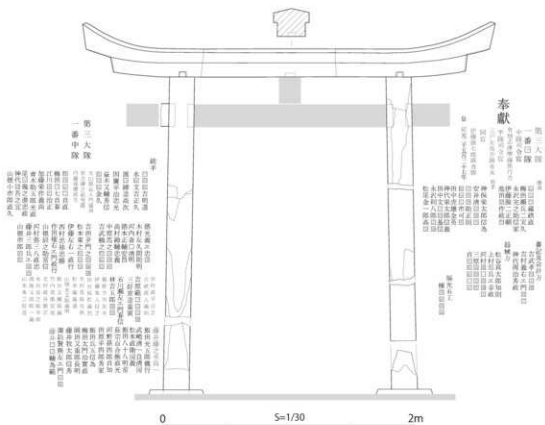
また、水戸藩の後期水戸学の泰斗である藤田東湖は、当年(天保11年)が神武天皇即位から2500年にあたることから「鳳曆二千五百年春 乾坤依旧韶光新」という漢詩を作っている。

神武天皇即位年から起算して、紀元を考える手法は鎌倉時代前期の天台座主・慈円が「愚管抄」で採用していることにまで遡り得るが、顕在化する切っ掛けは江戸時代前～後期に儒学・国学、神道学の研究が発展することに求められよう。

明治2(1869)年4月、刑法官権判事・津田真一郎(真道)は、「年号を廃し一元を可建の議」なる議案を公議所に提出する。ここでは「…櫻原ノ聖世御即位ノ年ヲ以テ元ヲ建、…」とあり、年号は煩雑であるから万国交際、明治維新の好機に際して廃止して、新たに神武天皇の即位の年を以て元を建て後世に及ぶべきと訴える(藤井1961)。

これは明治5(1872)年の「神武天皇御即位紀元(皇紀)」に繋がるものであるが、啓蒙家として知られる津田真道も幕末期には平田篤篤(篤風)の娘婿の門人として国学を学んでいる。当時の平田派の実質の学頭は大國隆正であることから、津田も大國の影響を受けていることが考えられる(田原1961、前田2007)。

令和の今日において、「皇紀」・「紀元」という暦



鳥居柱の残存部分（縮尺任意）



0 25cm
 $S=1/5$

第3図 豊栄神社小鳥居実測図および「皇紀元二千五百二十七年」刻字箇所写真・補刻トレース図

については、戦前の帝国主義時代の国策によって使用された年号というイメージがある。特に、昭和15(1940)年に実施された「紀元二千六百年式典」をはじめとした諸行事で大々的に使用・宣伝されたことはよく知られているであろう。

しかし、「皇紀」、「紀元」年号は何時ごろから使われたのか?というその始源に関する問いかけや議論はほとんど耳目に触れることがない。戦後以来、近代の国策と連動していた皇国史観の敷衍手段の一つである「皇紀・紀元」について、歴史研究者が忌避し、研究課題としてこなかったことが想像できる。

しかしながら、豊栄神社で発見された「皇紀元二千五百二十七年」の銘文は、江戸時代に遡る希有な事例として大変興味深い資料であり、「紀元」・「皇紀」の金石文表現の嚆矢としても位置づけられるであろう。

2. 「皇紀元」刻字の背景

豊栄神社には41基以上の石造物が寄進されているがその中でも、紀年銘で「皇紀元」が使用された例は、この小島居だけであり特殊な事例であることが想定される。この小島居を寄進した人物から概観してみよう。

寄進者 この島居を奉納寄進したのは、装束銃第三大隊一番中隊であり、中隊司令士は有地志津摩(慶応2年9月～慶応3年10月の間、中隊指令士)、半隊司令官は三戸左馬之助(慶応3年1月23日に任官)、伊藤源七郎(慶応2年6月1日に任官)が記載(刻字)される。小隊司令士は二番小隊で井上弥八郎(慶応3年1月27日任官)→大多和三介(慶応3年3月17日任官)→大田久太郎(慶応3年4月8日任官)と短期間で変遷しているため小島居の銘文に記載がない。また、一番小隊の司令士については長州藩政史料「諸記録綴込」から抽出した「諸隊関係編年史料」にも任免記事が見られない(山口県2001、山口県2010)。この時期の当該隊の小隊司令士は異動が頻繁であることから、寄進者に名を連ねていないものと考えられる。

装束銃第三大隊一番中隊は、慶応2年6月～7月の石州口の戦いにおいて、中隊司令士・井上与四郎のもと戦闘を行っている。慶応2年7月の大森占領後、駐屯部隊は中隊の単位で百日前後の勤務の後に他中隊と交替し、長州に帰陣している。第三大隊一番・二番中隊は慶応3年2月の時点で大森に駐屯していたと考えられ、豊栄神社境内地の中では早い時期に重要な石造物を寄進している。

なお、有地志津摩は石州口の戦いでは、装束銃第三大隊二番中隊一番小隊司令士として実際の戦闘を経験している。

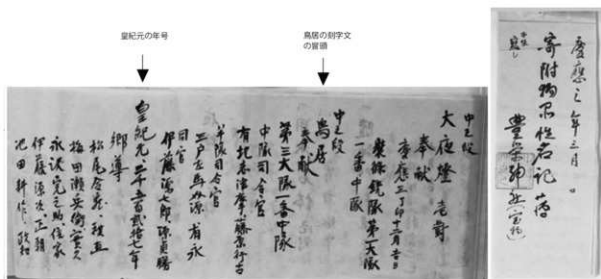
島居が寄進された時点で中隊司令士であった有地志津摩は、幕長戦争後の戊辰戦争最終盤の箱館戦争でも活躍が知られる。明治2(1869)年4月4日、箱館戦争において官軍第二大隊の「監軍」に就いており、同年5月21日、箱館平定後に蝦夷地鎮定配置の任務についている(相野2006)。明治2年9月14日には第二大隊の蝦夷地掃討戦の功勞として政府から金350両を受ける(アジア歴史資料センター)、といった後歴がある。

幕長戦争時の長州藩諸隊では、編成上、大隊-中隊-小隊-半隊の階層をもって構成されている。その中で中隊-半隊には指揮官として司令士が任じられているが、大隊司令士は不在である。つまり、中隊指令士が実質的な隊指揮官となり重責である。

豊栄神社に石造物を寄進した諸隊の中隊司令士で明治期に活躍した人物として、有地品之充(海軍中將、貴族院議員)、武藤正明(初代大阪駅長)、栗屋則俊(陸軍近衛局歩兵第1連隊中隊長のちに東京鎮台高崎営所副官)などがいる。中隊司令士という職務は、相応の見識やリーダーシップが必要な地位といえよう。

思想的背景 幕末期の長州藩においては尊皇攘夷思想が敷衍し、武士階層に止まらず町人や農民の一部にまでその思想が及んだことが知られる。長州藩においては、それが奇兵隊等の非正規軍の編成にも繋がったことは周知のとおりである。

長州藩の尊皇攘夷思想を形作る根幹には兵学、国学、復古神道、水戸学など様々な学問流派の人物の



第4図 豊栄神社寄附物品姓名記簿(写)の小島居記載の冒頭部分

影響があるとされる(上原2020)。17世紀の山鹿素行、山崎闇斎に始まり、18世紀の本居宣長を経て、19世紀には平田篤胤が尊皇思想の醸成を牽引する。また、一方長州藩に隣接する津和野藩では19世紀に大國隆正が登場し、平田派を継承する津和野派の神道学派を形成して長州にも影響を与えている(渡田2013)。

これらの学問的前史の影響を受け幕末の長州藩では、国学者・近藤芳樹、青山清が輩出されたほか、山鹿流兵学や後期水戸学を学んだ吉田松陰が登場した。特に吉田松陰は、若手長州藩士の学問的・思想的指導者として極めて大きな存在であったといえる。高杉晋作や久坂玄瑞など多くの長州藩・明治政府を牽引した志士はその門下から排出されている。

また、天誅組の変・生野の変にも関与する福岡藩士・平野国臣や久留米出身の国学者・真木和泉らも長州藩の諸子とは親交がある。幕末期の長州藩周辺には多くの国学思想家・活動家が往来していたことは特筆されよう(舟久保2023)。

3. 島根県内の事例

島根県内で管見の限り知り得た「皇紀」、「紀元」銘を持つ石造物は55例にのぼる。そのうち、41例は昭和15年：皇紀2600年(皇紀紀2601年も含む)のものである。この年は、皇紀2600年記念式典やそれに付随する行事が日本各地で行われており、神社等へ

の石造物の奉納・寄進が盛んに行われた。また、10例は昭和5(1930)年から昭和14(1939)年の間に寄進が行われた事例であり、併せて51例が昭和時代になってからのものである。(第1表)

明治時代のものとしては、明治6(1873)年：紀元2533年の神並山天満宮(浜田市天満町)灯籠2基、明治36(1903)年の今宮神社(浜田市杉戸町)の旧島居の柱を転用した石碑が知られる。神並山天満宮の灯籠は明治5年11月15日の太政官布告の半年後の寄進という古例であり、豊栄神社例に次ぐ古い時期のものである。(第5図)

また、松江市竹矢町の稲荷神社島居が明治31(1889)年：紀元2558年に建立されており、出雲部では最古例として位置づけられる。

豊栄神社の小島居は、これらの事例をさらに遡る慶応3(1867)年の建立であり、現状では島根県最古例である。また、全国的に視野を広げてみても「皇紀」、「紀元」銘の刻字された石造物の年代別の建立傾向は島根県と同様であるが、明治5年を遡る事例は管見の限り確認できていない。(第2表)

4. まとめ

一豊栄神社石造島居の「皇紀元」刻字の意義一

慶応3年、豊栄神社に寄進された石造小島居に刻字された「皇紀元」について紹介し、その特殊性や

造立の背景について述べてきた。類似並びに先行研究も少ないため、比較材料に欠いた状態での推測によるところもあるが、一応の要約をしておきたい。

・「紀元」、「皇紀」紀年銘（金石文）としては、鳥根県最古の事例である。明治5年に「神武天皇即位紀元（皇紀）」が正式に制定される以前の事例として極めて貴重である。また、全国的に見ても管見の限りこれに匹敵するような江戸時代に遡る古例の存在は知られない。

・「紀元」、「皇紀」という表記は明治5年11月の太政官布告以降に定式化していくことになるが、明治～大正期においては「紀元」の使用が主流で、「皇紀」を用いた例は管見の限り鳥根県内では2例にとどまる。昭和期に入ると「皇紀」の使用例が増加するが、「紀元」も併用される傾向が看守できる。

このように近代を通じて基本的には「紀元」が用いられ、昭和期に「皇紀」の使用が増加するのである。豊栄神社の石造鳥居でみられた「皇紀元」の刻字は、いまだその表現が定型化していない時期のものであることが貴重である。江戸時代においては「紀元」という考え方の基本的認識はあるが、それについての表現方法はいまだ定式化しておらず表記揺れが認められるのである。

・長州藩内で国学や尊皇思想が中堅武士階層にもよく普及している状況が現れている事象と評価できる。装束銃第三大隊一番中隊の司令官級の人物（有地、三戸、伊藤）の見識が反映されているとみられ、発案者が絞られる点は特筆される。

・山口市の豊栄神社本社をはじめ、長州藩内ではこのような事例はなく、戦時下の出先駐屯地という上位権力の空白域で生じた特異な事例として注目できる。

一特殊な条件が重なった造立一

大田市大森町の豊栄神社の建造物や石造物群については、これまでも数度に及ぶ調査が実施され、文献史料からも検討が加えられてきた。市道銀山線に面することからも石見銀山遺跡を訪問する観光客も

容易にアプローチできる場所として知られており、訪問者から見て比較的身近な神社である。

なにげなく目にしているが当社に寄進された石造物群は、ひとことで言えば異様・異常な状況での寄進によるものである。山口市の豊栄神社・野田神社では、石造物を個人名で寄進しているのは毛利家当主や毛利家連枝の当主などの爵位を持つ人々である。また、武士階層では「吉敷郡北部士族中」など郡単位での寄進である。大田市の豊栄神社のように、軍監・参謀クラスはもとより中隊単位での寄進は希なことである。そして中隊の構成員まで刻名される事例も希少な事例であろう。

この特異な事象の要因を抽出すれば、以下のことがいえるであろう。

・石造物寄進の意欲 幕長戦争での勝利により、起死回生を実現した長州藩士達の高揚感と藩祖・毛利元就への報恩は、豊栄神社の復興と石造物寄進の大きな原動力であろう。慶応2年7月の石州口の戦いの勝利から、豊栄神社の石造物寄進までは、半年以上経過しているうえ駐屯している藩士も入れ替わりが見られる。しかし、時局は幕長戦争全体の勝利が確定し、藩士の高揚感は継続していたのであろう。

・「皇紀元」の知識 「皇紀元」、「神武天皇即位紀元」については、国学・復古神道が盛んで尊皇思想が色濃く敷衍した長州藩の武士階層では知識として共有されていたのかもしれない。

ただし、長州藩の本地では江戸時代の間で神社に寄進する鳥居・灯籠などの石造物に「皇紀元」を刻銘する事例は知られない。江戸時代においては「皇紀元」の石造物への刻字は憚られた可能性もあり、またその機会もなかったであろう。江戸時代において「神武天皇紀元」の考え方は未だ国学等の一学説の範疇であり、それを神社等の石造物に刻字することは勳王思想（倒幕の意の有無に限らず）を表明してしまうため自他共に危険な行為なのである。

これは同じく尊皇思想の影響が強い薩摩藩などでも幕末期の「皇紀・紀元」表記の金石文は見られないことからも首肯されよう。

・上位権力の空白 当時の石見銀山は幕府から派遣



神並山天満宮灯籠（浜田市天満町 皇紀 2533 年：西曆 1873 年：明治 6 年）

紀元制定の太政官布告から半年後の事例。明治維新後に浜田県に出生した国学者・藤井宗雄の関与が想定される。



神並山天満宮 石鳥居（嘉永 5 年：1852 年）

若進者の一人に名前がみえる江尾小右衛門兼愛・兼孝父子は、鍋石村の大庄屋で卸業も営む。平田萬胤の門人であり、同郷の藤井宗雄の後援者。



左：今宮神社 鳥居転用石碑（浜田市杉戸町）

（皇紀 2563 年：西曆 1903 年：明治 36 年）

右：稲荷神社 鳥居（松江市八幡町）

（皇紀 2558 年：西曆 1898 年：明治 31 年）

第 5 図 浜田市・松江市で明治期の「紀元」年号銘を刻字する事例

された代官や手附、それを補佐する在地の附地役人までが備後・備中に避難逃亡しており、大森陣屋に駐屯した長州軍が軍政を行った（矢野2014, 2016）。また、長州藩の家老などの上級家臣ではなく、中級以下の武士階層といえる軍監・参謀クラスによる軍政であり、上位（幕府・大名）権力による直接の支配や監督がないという点では、権力による監視・監督圧力が低下し希薄な状況が生じていたといえる。

「津和野藩士 奉公事跡」による大國隆正伝では、大國隆正は文久2（1862）年12月に石見銀山領の大國村を訪れ、安井好妻の家に投宿しているが、当時幕府直轄領であった当地では頗る勤王の徒を嫌忌していたという。そのような中で大國隆正の学説・人格に敬服していた安井は大國を庇護したため、半年ほど大國村に逗留している（松浦2001）。このように直近まで幕府領であった反動は大きく作用しているといえよう。⁽²⁾

慶応2年10月には、石州口指揮役として若干18歳の毛利彝太郎（親信：後に右田毛利家12代当主）が石州に赴任するが、石州根拠地のとされる浜田に駐在したため、大森を詳細に検分した可能性は低い。

このように、幾つかの要因が奇跡的に重なった結果、豊栄神社の石造物寄進や類例の少ない「皇紀元」の刻銘につながったものといえよう。

また、浜田市の神並山天満宮の灯笼は明治6年6月の寄進であり、件の太政官布告の半年後の遺造である。これについても、幕長戦争によって浜田藩主・松平武聡と家臣団が美作国に退去し、大森と同様に長州藩の軍政が敷かれたため大名権力は衰退している。そして尊皇思想を持った長州藩士の影響や在地の国学者・藤井宗雄、牛尾弘篤の存在は大きく影響していると推察される。神並山天満宮の石鳥居は嘉永5年に建立されているが、藤井宗男の後援者である鍋石村の庄屋で鋸業も手がけた江尾小右衛門が寄進者の1人に名を連ねていることも示唆的である。⁽⁴⁾

石見地域に古例の「皇紀・紀元」の金石文が複数存在することは、長州藩の現地駐屯による軍政という条件から見れば、ある意味必然ともいえるので

ある。

「皇紀」、「紀元」銘の入った石造物が何時から造られたのか？というテーマは、これまで石造物研究でも、近代史研究でも研究課題として取り組まれたことはほとんどない。豊栄神社の皇紀元2527年銘を持つ鳥居は、明治政府による明治5年の太政官布告以前の「紀元」認識の現れの一例であり、国学・復古神道などに基づいた尊皇思想が顕現化したものといえよう。

石見銀山では、時代が転換する時に最先端事象が現れることがしばしばある。日本最古級の「皇紀元」紀年銘もその一つといえよう。大仰にいえば、石見銀山遺跡には明治維新の礎があるのである。

令和4年度の豊栄神社石造物調査については、概要を大田市教育委員会2023「豊栄神社保存修理工事報告書」に掲載している。また、本報告については別途刊行予定の石見銀山遺跡石造物調査報告書に掲載予定である。

豊栄神社の石造物調査では豊栄神社総代の野津英夫氏の協力と助言を頂いた。また、小報を記すにあたっては、矢野健太郎から紀元・皇紀に関する先行研究について教示を得た。なお、生田光明、大橋泰夫、佐藤聖聖、仲野義文、西尾克己、衆岡実、岡野大志の各氏からは豊栄神社・皇紀などに關して多くの知見をご教示頂いた。筆者は近代史や「紀元」、「皇紀」について、全くの門外漢であるために頂いた知見を十分に咀嚼はできていないと思われるが、記して感謝の意を表したい。

【註】

- (1)「豊栄神社寄附物品姓名記簿（写）」は、表に慶応三年三月の年月日が記されるが、内容中に明治6年に寄進された灯笼の記載が含まれるため、完全な成立はそれ以降に下ると推定される。内容は豊栄神社に寄進された石造物を、参道、中・上段、本殿周囲の順に記述し、それぞれの石造物について刻字されているものと同一の内容を記載するものである。
- (2)この数字は、神社に寄進された石造物を中心にカウントした作業中のものである。学校敷地内に設置されたものや忠魂碑・招魂碑、各種石碑類の悉皆調査が進めば倍増する可能性がある。鳥取県下の事例調査を行った駒井正明氏によれば、紀元2600年の寄進事例だけで182件が確認されている（駒井2023）。今後の自治体単位での悉皆調査

が望まれるところである。

- (3) 大國隆正 (1792-1871) は、文久2 (1862) 年12月に津和野を発ち、石見国遼摩郡大國村に入り、大崎清雄宅および、庄屋の安井好兼宅に滞在する。その間に八千子山大國主神社に大國主神の旧跡を発見し、神社の再建を奨める。これにより大國姓に改める。

文久3 (1863) 年には、静岡、大田、用合村の神代古跡をめぐる。6月には出雲に行き、平田の豪商・石橋道喜宅に滞在する。石橋道喜はこれを喜び門人となる。11月に出雲を出発し、大國村の安井好兼宅に戻る。

元治元 (1864) 年3月、大國村を出発し、京都に帰る。この時73才。

1年4ヶ月余り、在勤所である津和野・京都・江戸から離れて、石見・出雲に潜伏し、さらに改名までしたのは、尊皇思想の熱心とみられて幕府側から警戒されていたことが要因である。しかし、実際には大國隆正は尊皇護幕主義で、幕府に対しては絶対恭順主義を取っている。このような大國隆正の協調姿勢を不満に思った藩吏・倒幕思想の弟子達は、この時期に大國門下から離脱している。(松浦光修 2001『増補 大國隆正全集』第八巻補遺 松浦光修編 国書刊行会による)

- (4) 藤井宗雄は、文政6 (1823) 年、鍋石村 (現・浜田市鍋石町) 庄屋藤田屋藤井宗敬の三男として生まれた。同郷の富豪・たたら業の江尾兼愛・兼孝父子の好學に刺激され平田篤風門人となり、国学に傾倒するなど、勉學に勤しみ、国学者・神道学者として名をなした。江尾小石衛門兼孝は神皇山天満宮の鳥居寄進 (嘉永5年:1852年) の発起人の1人として銘を刻んでいる。

藤井は、安政4年 (1857) に『中御柱』を著わしたのをはじめ、『久遠の御柱』、『鏡鏡』を出す。藤原著作目録に「余れ曾て書籍を著す。概ね八十部二百巻なり…」とあるように『石見国神代記』、『神代文字考』、『石見国郡考』、『石見年表』、『震譚』、『浜田鑑』などの膨大な著作を執筆した。

明治3年 (1870) に浜田県出仕を命ぜられ県内神社取調を行うとともに、明治10年 (1877) には、石見国神道事務分局長を依頼されるなど、多忙な生活の中で、歌を嗜み、その詠草八千首と称せられる。

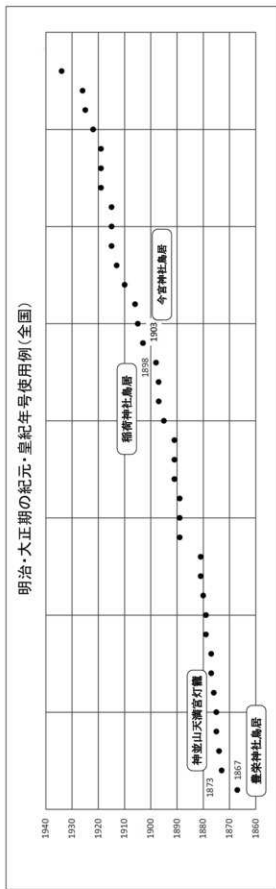
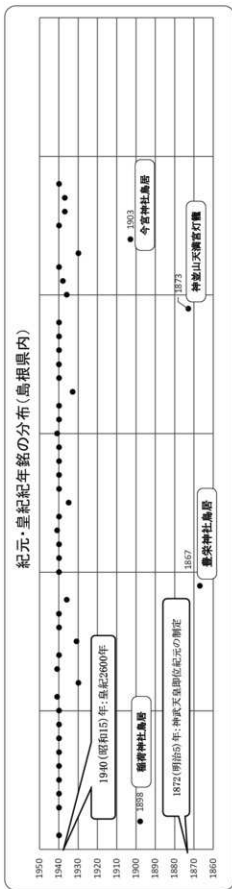
明治32年 (1899) 鍋石村に帰り、同39年 (1906) 84歳で没した。

牛尾弘篤は、現在の浜田市美川町内村の郷社、高井八幡宮の宮司を務めた。文政12 (1829) 年9月9日生まれ。明治34年 (1901) 9月10日没。

【参考文献】

- 岩橋孝典 2023『石造物からみた豊栄神社 ～新たに確認された石造物について～』『豊栄神社保存修理工事報告書』大田市教育委員会
- 上原雅文 2020『幕末長州藩の思想』『人文研究』200号 神奈川大学人文学会
- 遠藤浩巳 2002『長安寺と豊栄神社』『石見銀山遺跡調査ノート』一 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会
- 大田市教育委員会 2023『豊栄神社保存修理工事報告書』
- 国立公文書館 アジア歴史資料センター HP『第二大隊其外數十名へ賞金下賜』明治2年9月14日 太政官
- 駒井正明 2023『石造物から見た近現代鳥取の神社』『鳥取地域史研究』第25号 鳥取地域史研究会
- 相野哲也 2006『箱館戦争 戊辰戦争最終戦』『函館学 函館の歴史を語る』第4回
- 鈴木洋仁 2014『時間意識の近代-元号、皇紀、新暦を素材として-』『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』No.87
- 田原嗣郎 1961『論説』幕末国学思想の一類型：大國隆正についての断片的考察』『史林』第44巻第1号 史学研究会
- 仲野義文 2018『豊栄神社の成立』『石見銀山学とはじめ』I 大田市教育委員会
- 中山久四郎 1961『江戸時代における神武紀元の尊重』『神武天皇と日本の歴史』小川書店
- 波田永実 2013『大國隆正の歴史認識と政治思想』『流経法学』第13巻第1号 流通経済大学法学部
- 藤井貞文 1961『明治維新前後における神武天皇景仰の思想と紀元節の制定』『神武天皇と日本の歴史』小川書店
- 舟久保藍 2023『天孫祖の変』中央公論新社
- 前田 勉 2007『津田真道の初期思想』『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』56 愛知教育大学
- 松浦光修 2001『維新前後 津和野藩士奉公事蹟 巻之上 大國隆正』『増補 大國隆正全集』第八巻補遺 松浦光修編 国書刊行会
- 目次謙一 2013『毛利元就肖像と石見銀山長安寺』『季刊文化財』第129号 鳥根県文化財愛護協会
- 矢野健太郎 2014『豊栄神社の成立をめぐって』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』四 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 矢野健太郎 2016『幕長戦争と石見銀山』『平成27年度 石見銀山遺跡関連講座記録集』鳥根県教育委員会
- 山口昂 2001『山口県史 史料編 幕末維新 六』
- 山口昂 2010『山口県史 史料編 幕末維新 四』

第3表 紀元・皇紀年銘の時間的分布状況



城上神社拝殿ふすま下張り文書の調査 —本殿造営における職人「備前石工」と「木挽」—

大田市石見銀山課 遠藤 浩巳

はじめに

城上神社は大田市大森町の北に鎮座する式内社である。令和4年4月に拝殿内にある腐朽したふすまの修理が検討されるなかで下張り文書が発見され、その取扱い協議が行われた。城上神社の神社史や歴史的環境、拝殿が鳥根県指定有形文化財（建造物）であること、現在でも大森町氏神社として町民の信仰が篤いことなどを考慮し、氏子総代会の了解の上、下張り文書のはがし作業と古文書調査を石見銀山世界遺産センターにておこなうことにした。作業は同年7月から8月までのうち概ね1ヶ月を要し、終了後に古文書調査を実施した。注(1)

ここでは、はがし作業と調査概要を報告すると共に、本殿造営に関わった職人である石工と木挽に関する史料があることが判明したので、その内容についても報告したい。なお石工は備前国から招聘した「備前石工」であり、この備前石工については石見銀山遺跡テーマ別調査研究として、石見銀山鎮内の寺社境内地を対象に調査研究が進められている。(2)

1 ふすま下張り文書の概要

(1) 城上神社拝殿内ふすまと下張り文書の概要

図1は拝殿平面図に、各部屋の名称と部屋を仕切るふすまに仮番号を付したものである。拝殿内は本殿側に幣殿があり、本殿に向かって左側に神楽殿・神供舎、右側に直会殿・御輿舎となる。

神楽殿・神供舎のふすま①②は、幣殿側のふすま表紙が無地となるが、神楽殿・神供舎側は表紙がなく下地の板が露出している。③④についてはふすま両側とも無地の表紙となっている。⑤⑥、⑧⑨は幣殿側にふすま絵が描かれている。⑦⑩、⑪⑫とも幣殿側のみ無地の表紙となっており、拝殿側は表紙がなく下地の板が露出している。

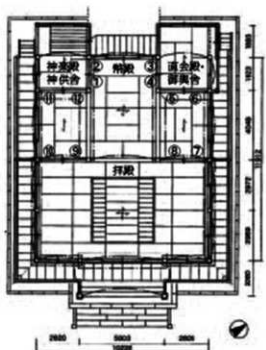


図1 城上神社拝殿平面図とふすま番号



写真1 ふすま表紙と下張り文書



写真2 ふすま⑤⑥「鹿と紅葉」

今回の調査では、⑤⑥、⑦⑧については⑤⑥が鹿と紅葉（写真2）、⑨⑩が鶴と白雪が描かれており、梶谷円隣斎作の拝殿天井に描かれた「鳴き籠」との関連やふすま絵の今後の保存を検討するために、下張り文書のはがし作業とその調査は未実施である。

（2）はがし作業と古文書の概要

ふすまは世界遺産センターに建具業者によって持ち込まれ、順次はがし作業に取り掛かった。ふすまの表紙、下張りと下地などの現状を確認すると下地骨は通常の格子ではなく板となっており、下張り文書には糊付けがしっかり残り、はがしにくい状態であった。そのため、霧吹きで十分に水分を含ませたのちに、竹べらによって1点ずつ上層から紙をはがし、乾燥後に番号を書いた付箋を糊付けした。はがした文書はふすま別に分類し、番号順に袋に入れて世界遺産センターで保管した。その後ふすまは建具業者が修理のために回収した。

ふすまごとの古文書の概要は次のとおりである。

①②については明治期と推定される大福帳が多い。②に明治2年、3年など年紀が記載されたものがある。①に「宝暦7年」（1757）の文字があり、江戸期の文書を含むことがわかる。

③④は、両面に下張りがあるものの4面とも銭表記による大福帳が多い。なかに貫文表記の商品名があり江戸期のものも含まれる。③に明治17年(1884)の文書がある

⑦⑧⑨⑩は幣殿を区切るふすまであるが、表紙の下には縦帳に土地の筆ごとの図面と所有者、地目、

面積計算を記載した文書が多量に下張りされていること、その下層には横帳に氏名、日付などが記載された文書があることが明らかになった。

⑧の下張り文書には、「明治十九年拾月 元崖地無租地へ編入願 安濃郡川合村」（以下「編入願」という）と記載された表紙がある。明治期に始まる地租改正事業の伴い「一筆限図」と呼ばれる図面類が作成され、崖地と呼ばれる無租地であった山林原野を有租地に編入するために作成された帳簿と考えられる。⑦⑧⑨⑩すべてのふすま下張りに使用されている。

また、氏名、日付などがある横帳は、⑦の下張り下層に「文化11年戊4月吉日」と年紀のある「御普請方執事」によって作成された「御本社造祭木挽手間覚帳」（以下「覚帳」という）とある表紙である。人名、日付、人役、作料が記された覚帳が解体され、下張りに使用されたと考えられる。

⑧のふすまの明治19年の編入願、⑦の覚帳の裏書きにある「明治□年」の記載などから推察すると、明治19年以降に編入願と覚帳は解体され、下張りされたと考えられる。

2 造営職人の備前石工と木挽

（1）棟札と覚帳

覚帳の内容を検討するにあたり、文化12年(1815)本殿造営の棟札の記載内容を確認しておきたい。寛政12年(1800)の大火によって大森町の大半が焼失した際、城上神社も類焼している。その後、城上神社の再建については、棟札から造営の内容が窺え、その概要は次のとおりである。

- ・寛政12年(1800)3月20日火災により宮舎・末社・宝蔵・鳥井・樹木悉く炎上焼失し給馬殿のみが残ったが、これを仮の造宮として再建を始めた。
- ・文化9年(1812)4月22日に、幣殿・神楽殿・直会殿・神供舎・神奥屋・拝殿が竣工。
- ・文化11年(1814)6月24日に上棟を祝い、翌12年(1815)3月26日に神殿(本殿)が竣工し、3月26日に正遷宮を行った。

棟札には本殿造営に関わった職人の名前が記さ

れ、大工・木挽・葺師・鍛冶などとともに、4人の石工の名がみえ、「石工備前小嶋〇磯吉」「同佐藏」「同福光村十五良」「大田甚八」とある。4人のうち2人が備前石工であり、備前国小嶋郡宮浦村か阿津村の出身の石工と推定される。

木挽については、「木挽棟梁 大田村 橋元長兵衛」と「同先市村 古畑貞十良」の2人の名前がみえ、大森町近隣が居所となっている。(3)

(2) 備前石工に関する記載

覚帳は全紙を横に2つに折り重ねて綴じた横帳で、表題は竖書きである。この表紙の周囲の下張りは、同じ横帳と推測される全紙が重ねて張られ、「職人名・月日・人役(○工)・作料(○貫文)」が記載されていた。

これらの下張りは表紙からわかるように木挽の手間を記録した覚帳と推定されるものの、そのほかに「石屋」という職名の記載があることから、この覚帳に書き加えたものか、あるいは同じ書式の別の覚帳が存在した可能性はある。(4)

さらに「石屋」については、「備前石屋手間合貳百五拾四工 此作料銀五百八匁也 但老工ニ付銀貳匁々」と記載があり、備前国石屋の手間と手間賃は、延254工(人役)に対して1工あたり銀2匁



写真3 表紙「御本社御造梁木挽手間覚帳」

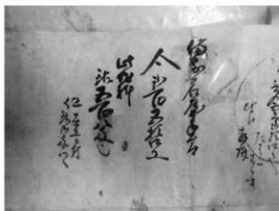


写真4 「備前石屋」の記載部分

が作料として支払われ、合計銀508匁となっている。このことから備前石工の手間賃は銀立てで記載され、銀立てで記載される木挽手間賃と区別される。この覚帳全体を通じて、作料の銀立てで匁表記の職人は石工であり、銀立てで貫文表記の職人は木挽と考えられる。

備前石工の手間は延254工(人役)であり、棟札にみえる職人名は「磯吉」と「佐藏」である。一方、覚帳に記載された職人で手間賃が一工あたり2匁となっている名前は、「磯平」「兼藏」「乙吉」「弥吉」「紋四郎」の5人が確認される。石工職人すべてが確認されていないものの、棟札にある「磯吉」「佐藏」の2名が棟梁で、その配下の職人が最低でも5名はいると推測される。この5人の出面は2月から5月となっており、棟札の記載は文化11年6月の上棟であることから、石工職人の出職期間は文化10年の2月から5月を含む期間と考えられる。

また覚帳にみえる手間賃銀2匁は銭約216文であ



写真5 城上神社本殿の石垣



写真6 同上(部分)

り、木挽の1工の作料が約102文前後に対し約2倍となることや、地元の石工との協働の内容についても検討が必要である。

写真5、6は城上神社石垣であるが、備前石工の作例の特徴である、大小不定形な切石を擦り合せて積むという技術が確認される。文政2年(1819)の銀山佐兎売山神社の作例も同様である。(5)

(3) 木挽に関する記載

木挽は近世になると前引大鋸を使用して製材を行なう職人であるが、石見銀山領における柚・木挽・大工といった建築に関わる職人の実態については十分に解明されているとは言えない。(6)

文化12年の本殿造営棟札をみると、木挽として、「棟梁 大国村 橋元長兵衛」と「同先市原村 古堀定十郎」の2人の職人名がある。一方覚書をみると、採取した古文書にみえる銭立て標記のある職人は39名にも上る。下張りの表紙である「文化11年戊4月吉日」とその後の文化11年6月の上棟、文化12年3月の竣工という工程を考えると、出入りはあるにしろ、全ての職人がこの表紙の覚帳に収められたものと断定はできず、またすべてが木挽ではなく大工を含んでいる可能性もある。

採取した古文書から、本殿造営に関わるいくつかの記載を取り上げてみたい。棟札にある棟梁の「橋元長兵衛」と同一人物か検討が必要だが、長兵衛は3月から8月まで出勤し、3月晦日があることから、文化10年の出勤であると考えられ、また一工につき102文の手間賃を得ていることがわかる。

また、「山入」「木屋入」という記載は、「山入」

は木材の原木の伐採現場、「木屋入」は建築現場や「大工」に近い場所に置かれた「木挽木屋」の可能性もある。他に「千原行」という記載とともにその間の手間賃の支払いがあることから、先にみた木材の原木の伐採現場のひとつが九日市組に属する「千原村」と考えられる。邑智郡千原村は近世から近代にかけて森林資源が豊かな村であった。

さらに「棟梁脇 銀山孫右衛門」と「民平」という二人の職人について検討してみたい。前者の「銀山孫右衛門」は棟札にみえる「大工棟梁 同後見 銀山 孫右衛門」と同一人物と考えられ、大工の棟梁脇である孫右衛門は佐兎売山神社の文政2年棟札等にもみえる「石賀孫右衛門」のことであり、後者の「民平」は同じく棟札にみえる「同後見 青木伝蔵」と同一族で、大工の棟梁脇の「同後見 □村青木民平」と考えられる。このことから、大工の覚帳も存在した可能性がある。この青木伝蔵は佐兎売山神社の文政2年の拝殿本殿棟札にみえる「御役所大工」として記載されていることから、代官所と関係のある寺社の造営に携わっていたことになり、青木民平もその可能性がある。(7)

この民平については、10月22日から11月18日までの文化10年の出勤と推定される記載があり、11月の記載の最後に「外二先達而半工分入 是八御本社地引水見」とあり、本殿造営に関わって地引である土地の整地や水処理と想定される水見などを目論見(計画)のために半日出勤したことがわかる。これは棟梁脇であり御役所大工としての仕事を裏付けるのかもしれない。

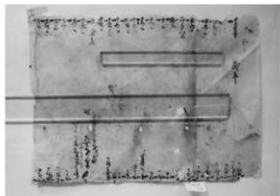


写真7 「民平」に関して記載された古文書



写真8 「御本社地引水見」の部分

18世紀には木挽と大工は分業するものの、近接する場所で作業をしていたと考えられているが、分業の内容などその実態は不明な点が多い。今後、手がかかりとなる史料の発見によって知見が得られることを期待したい。

3 寛政の大火後の寺社再建

寛政12年の大火後の城上神社の再建については、文化12年棟札からその経過を辿ることができるが、関連する造営費用等について史料から検討してみたい。覚書の表題には「御普請方執事」によって備前石工と木挽の手間と手間賃が記載された簿冊で、この「御普請方」は大森御役所に置かれた機関であり、そこに大森御役所大工が所属して普請に関わったと推測される。

造営費用全体を示す史料はこれまで知られていないが、城上神社の三神主が大森町町役人に対して修復費用について意見をまとめた「口演」(『熊谷家文書』史料番号19-432、個人蔵)がある。

これは拝殿が竣工した年で、これから本殿の再建に向かおうとする文化9年(1812)に記録されたものである。内容は以前から備蓄されている「城上神社御修復銀」と「町間銀」に今回の火災で集まった「助情銀」を加え、造営費の不足分4貫目を捻出しようとしたことがわかる。このことは造営費を確保するために、神主、町役人及び大森町住民が一体となって再建に向けて進んでいたことを示している。

文化12年棟札の裏面には、前御代官前沢藤十郎を筆頭に銀山附役人、同同心、同中間をはじめ大森町

古役郷宿、町人による講中、郡中としては銀山御料6組、銀山・大森町・佐摩上下産子の名が記され、広範囲の人々から助情金・寄付金が集められたことが知られている。

さらには、再建と石工の関係を示す史料として、本殿造営後の日付となる文化12年4月の「請取一札之事」(『熊谷家文書』史料番号10-10、個人蔵)がある。これは福光村の石工甚七が田儀屋宛に、石玉垣14本の代金の領収と今後玉垣に名前を刻むことを確約した内容となっている。本殿造営後に境内地の整備が着実に進められていることを示している。

一方、大森町中程にある真言宗親世寺の本堂の再建をみると、文化14年(1817)に銀山にあった安立寺本堂を移築するかたちで再建されたと考えられている。『親世寺文書』によると、この時の移転経費に対する援助を銀山領内の真言宗寺院に依頼していることや文政7年(1824)の「本堂再建動化帳」からは、郡中動化をお願いしたいが市中の焼亡のようすから再建を願い出ることを憚ったなど、再建に向けて困難を極めた様子が窺える。(8)

銀山の佐尻売山神社の安政2年(1855)の「山神宮屋根替日記」(『佐尻売山神社文書』史料番号47)によれば、造営費は御公儀普請として銀山方へ拝借額が出ていることがわかる。銀山領内の寺社普請の造営費支出はその時の社会情勢に左右され、厳しい財政状況の下で一様でなかったと推察される。

おわりに

城上神社拝殿ふすま下張り文書の調査成果として、まず現地にある石垣の作例から調査が先行していた備前石工に関して、棟札に記載された以外の、職人や手間賃などの情報が得られ、今後の史料の発見が銀山領における出職などの具体的な解明につながる事が確認された。同時に記載されている木挽についてはその技術内容を含め実態を明らかにすることは困難ではあるものの、周知の棟札史料の分析から取組む必要性を感じたところである。今後の課題の一つに、大工と木挽の分業体制の実態解明をあげておきたい。

最後になりますが、下張り文書の取扱いについては、城上神社総代長の川上孝太郎氏からご理解とご協力をいただきました。はがし作業の手順については島根県世界遺産室の倉恒康一氏と協議しながら進め、作業は山本修三氏、漆谷ひとみ氏、高村玲子氏が参加しました。また古文書の読解については島根県世界遺産室の清水佳那子氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。

注

- (1) 下張り文書は建造物保存修理事業の工程で発見されることが多く、これまで石見銀山世界遺産センターがおこなう文献調査研究の対象としてきた。また各地の博物館等における調査や保存の取り組み事例を参考にした。主な文献に、松下正和「下張り文書の保存と活用～市民ボランティアとともに～」(『地域史研究』114号、2014年)、置室かの子・吉原大志「播磨国福本藩御係ふす下張り文書について」(『塵界』兵庫県立歴史博物館紀要第33号、2022年)がある。
- (2) 「備前石工」に関する文献史料の分析を中心とした研究に、根本修「備前藩御用石工の系譜と石工集団」(『岡山学ことはじめ』第3号、岡山市デジタルミュージアム、2008年)がある。
石見銀山領の備前石工については作例の報告や技術について検討した、尾村勝・新川隆・乗岡実・西尾克巳「石見委銀山における石垣の分類と変遷～温泉津及び周辺地域を中心として～」(『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5』島根県教育委員会・大田市教育委員会、2023年)、乗岡実「石見で活躍した備前石工」(『石見銀山研究』2号、石見銀山研究会、2022年)などがある。
- (3) 城上神社の建築様式をはじめ、棟札などの史料については「史跡石見銀山遺跡地内建造物(10社寺)調査報告書」(2013年、大田市教育委員会)に詳しい。その中で、10社寺の棟札にみえる建築工匠についての分析があり、有力大工家、「脚役所大工」についてもふれてある。
- (4) 備前国宮浦村の出職石工については、「石屋」と「石垣つき」の区別があったと指摘されている。注(2)乗岡報告を参照。
- (5) 備前石工の作例、特に城上神社石垣の特徴については、石見銀山テーマ別研究客員研究員の乗岡実氏、西尾克巳氏、また石垣調査担当の新川隆氏、尾村勝氏よりご教示をいただいた。
- (6) 石見銀山領における木挽に関する史料については代表作

ものに棟札があり、大工、小工、葺師とともに記されている。

また、木挽職人の技術については、星野欣也・土屋安見・石村具美「木挽職の技術」(『竹中大工道具館研究紀要』第6巻、1994年)を参考にした。

- (7) 注(3)を参照。
- (8) 観世音寺の本堂再建に関しては「観世音寺本堂」(『大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区保存事業概報』101、2013年、大田市教育委員会)に詳しい。また、寛政の大火後の復旧・復興に関しては、藤原雄高「恵みと災いの水」(『石見銀山学ことはじめⅡ水』第4章、大田市教育委員会、2019年)を参照されたい。

美郷町・松林山定徳寺について

—石見銀山百か寺の調査—

西尾 克己・持田 直人

1. はじめに

戦国期から江戸時代にかけて島根県大田市大森町の石見銀山には、銀山六谷とも呼ばれた銀山集落があり、多くの坑夫や商工業者が住み、石見最大の町として繁栄していた。各集落の中には寺院も点在し、大森町に存在した多くの寺院を「石見銀山百か寺」と呼ぶ⁽¹⁾。しかし、17世紀中頃以降に銀生産が減量するにつれて銀山集落も衰退し、寺院の中には遮摩郡内を中心として他所へ移ることが多くあった。

こので紹介する浄土宗九々王山松林院定徳寺(銀山での山号・院号で、寛延2年(1749)に松林山種勝院定徳寺に改称する。)は銀山開発初期の天正年間(1573~1592年)の創建とされ、山吹城跡南麓の大谷地区に所在した。その後、江戸時代中頃の宝永7年(1710)に邑智郡吾郷村(現美郷町吾郷)に移転し、援助者(大檀那)となった地元の有力者山根八左衛門種勝(1675~1745)⁽²⁾により土地や建物

をはじめ、仏像、仏具等の大部分も寄進された。よって、大森から移されたものは扁額や本尊の仏像等僅かであった。

以下、定徳寺の石見銀山での様子的一端と、吾郷村に移った折の状況を中心に記述してみたい。

2. 定徳寺の歴史

(1) 石見銀山での定徳寺

定徳寺の由緒 寺に残る「過去帳1号」の縁起「寺伝」⁽³⁾より知ることができる。これによると、開山は法譽慶公⁽⁴⁾で、天正年間の創建とある。開山の法譽慶公は天正5年(1577)2月24日に亡くなった以外のことは記録がなく、また、寺の開基の創立者も不明である。2世は超譽残香で、天正17年(1589)に後陽成天皇から「定徳」の宸翰を、さらに文祿4年(1595)に本山の布教担当の輪番職⁽⁵⁾に任じられ、紫衣を賜ったとある。このことから、

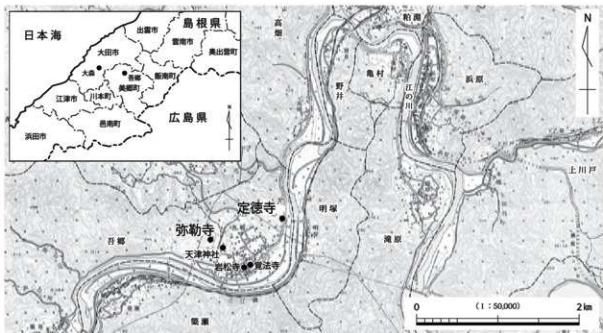


図1 定徳寺の位置図(地形図は美郷町管内図(北部)を使用)



写真1・2 「内過去帳1号」の寺伝(一部)



写真3 定徳寺跡(北から)

浄土宗の高僧であったと考えられる。その後、3世から5世までは銀山での住職であったが、その事績については「寺伝」に記載がない。

定徳寺跡 寺跡は大田市大森町大谷地区の奥にある。坂根口番所跡に隣接し、西側には小川(銀山川)を挟んで降露坂に向かう街道脇(温泉津沖泊道)の字「元浄徳寺」付近に所在していた。境内は東西12m、南北24mの平坦地で、現在は畑地使用されている。東隣の平坦地は明治の地籍図の字名が「徳善寺」とあり、浄土真宗松林山徳善寺の跡であった



写真4 定徳寺跡境内の岩窟と散乱する石塔

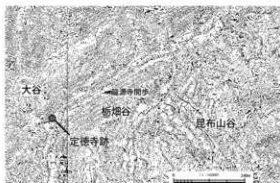


図2 石見銀山内の定徳寺跡位置図



図3 定徳寺跡位置図(平成27年の地籍図に加筆)



写真5 定徳寺本堂内と扁額



図4 定徳寺開山位牌と歴代住職(2~5世)位牌

と考えられる。明治初年の上地令の絵図⁽¹⁶⁶⁾にも同地に寺が描かれているが、明治6年(1873)、那賀郡旭町(現浜田市)に移転したとされる⁽¹⁶⁷⁾。なお、徳善寺の山号は「松林山」である。徳善寺の隣地にあった定徳寺の院号は「松林院」で、「松林」の文字が重なる。この付近の地名かもしれない。また、対岸の斜面の字名は「荒神寺後」である。よって法面と斜面との間の平坦地(元水田)には銀山百か寺の荒神寺があったと推定される。

(2) 定徳寺の銀山時代の痕跡

仏像・扁額 銀山から今の定徳寺に運ばれた仏像などは、木造阿彌陀立像、後醍醐天皇宸翰による扁



写真6 木造阿彌陀如来立像(旧本尊)

額、開基の位牌がある。

木造阿彌陀如来立像(旧本尊) 旧本像は木造で、高さ60cmを測る。本堂南西側の脇殿に安置されている。

「定徳寺什物其他取調書」に「□□不詳天正年中開山慶公和尚購求メ傳來」と記録が残る。また、全体の造形などから、京都などの中央で作成されたものであると考えられている。なお、この仏像は黒ずみ、当時の彩色を確認できないが、一部に金色を残している。

開山から吾郷村移転までの住職位牌 本堂の奥部には、内陣の東側奥の棚には住職の位牌があり、西の棚には元山根家の位牌が置かれている。東の棚には、開山からその後の住職、さらに大森の勝源寺中興(隋唐社教管上人)の位牌をはじめ、他の寺院の住職のものも混じっている。⁽¹⁶⁸⁾ 定徳寺が銀山の大谷にあった時の住職の位牌は、開山が1柱、2世から5世の4人の住職は合わせて1柱となっている。

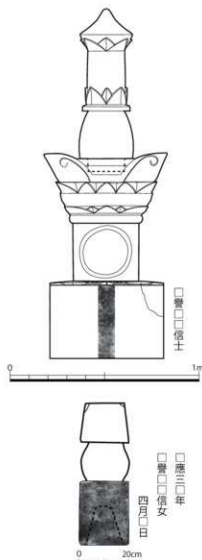


図5 定徳寺跡の岩窟内と付近の石塔実測図

開山の位牌は円相雲型の大型品で、須弥壇座が付き、高さは84cmである。中央の漆塗板には「當寺開山傳蓮社法譽慶公上人天和尙」の法名が彫られている。永く本堂に置かれていたため全体が煤けており、さらに文字の部分は黒漆が剥落している。この位牌は銀山の太谷からのものと推定される。2世から5世の位牌は平頭の札型で、高さは55cmである。表面の法名等は漆塗板に金字で表され、「當寺代々（各住職の法名）靈儀」とある。⁽⁸⁹⁾ また、裏面には2世から5世の没年月日が彫られている。位牌の形態はその後の住職のものと同じである。4代の住職をまとめて1柱にされていることから、吾郷村へ移転した後に作られたと考えられる。



写真7 定徳寺本堂

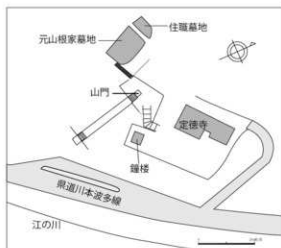


図6 定徳寺境内と墓地の位置図

扁額（後陽成天皇宸翰） 本堂内陣の長押に掛けられた寺額で、黒く塗られ縁をもち、縦112cm、横56cm程度の大きさである。紺色の額面に草書体で「定徳寺」と金字で書かれている。

境内地の岩窟と付近の石塔 銀山の定徳寺跡の背後の崖面には岩窟が2箇所掘られている。左窟（西）は横幅4.3m、奥行1.3m、高さ1.5mで、右窟（東）は横幅4m、奥行1.6m、高さ1.5mで、各壁とも垂直で箱形になる。岩質が柔らかく、入り口は2穴とも風化が進んでいる。また、南側の一部に幅1.3mの3段の階段がつく。なお、左窟の左右の端の岩壁に径50～60cmの穴があり、庇を支える柱の柱穴と推定される。石塔は左窟3基、右窟には数基が存在していたと考えられる。左窟の左端には大型の宝篋印塔が置かれていたが、今は前方に倒れている。

この石塔（図5）の総高は190cm程で、銀山の石塔では最大規模を測る。⁽⁸³⁾ 凝灰岩（福光石）製。

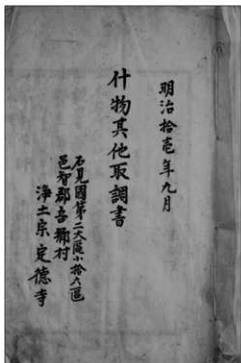


写真8 竹物其他取調書



写真9 本堂の喚鐘

相輪は、伏鉢の上方に突帯が廻り、その上部と宝珠の下方には蓮弁と間弁からなる請け花が付くが、九輪部には凹線はない。笠は軒の上部と下部に請花を二段にもち、隅飾には退化した庵手文がつく。塔身は正方体で、正面には月輪が彫られている。但し、風化が進み、梵字は読めない。基礎は正方体で、上部に退化した反花をもつ。正面には字が彫られているが、風化が進み、数個の文字（「梵字」□響□□信士）しか読めない。

凝灰岩（福光石）製の一石五輪塔は総高約60cm、最大幅（地輪）約15cmを測る。地輪は長方体で、水輪は縦に長い楕円形を呈し、火輪は直線的である。なお、地輪には「〇應三〇年 / 〇響□□信女 / 四月〇日」と銘文があり、承応3年（1654）に亡くなった浄土宗信者の女性であることが示されている。

3. 邑智郡吾郷村での定徳寺

（1）松林山種勝院定徳寺の概要

定徳寺は美郷町吾郷の東方に位置しており、江の川の右岸の急峻な斜面中腹に所在する。参道入口には県道川本波多線が南北方向に敷設されている。

当寺院は浄土宗知恩院派に属し、現住職で二十二

世となる。また、石見霊山においては8番札所として知られている。⁽²¹¹⁾

石見銀山にあった定徳寺は宝永7年（1710）に移転されている。当時の住職は6世遷譽了空である。移転及び再建については吾郷村の元山根家が多額の資財を投じており、現在の寺院所有物の多くは元山根家が寄付したものである。「寺伝」には山根八左衛門種勝が本堂、鐘樓、庫裡、山門などを建立したと記録されている。このうち、本堂については「寺伝」に残された棟札の写しにも記されている。「宝永七年龍集庚寅南呂下院二 / 御奉行都築小三郎尉正明公 / 中興開基 / 本運社遷譽上人尊阿二童子悦和尚 / 山根八左衛門尉種政 / 合棟梁湯里村 安江利右衛門 / 脇棟梁湯里村 安江磯右衛門 / 同志学村 中村磯右衛門 / 小工十人」⁽²¹²⁾とある。棟札の写しから、山根八左衛門種政が大森の奉行（当時は代官）の許諾を得て本堂を建立したことが読み取れる。

竹物などは定徳寺に残る文献史料に詳しく記載があり、今回参考としたものは「竹物其他取調書」と「臨時宗軌調査申告書」である。

以下、前述の資料を参考としながら、仏像をはじめ、各資料について概略を説明する。

表1 定徳寺所蔵史料及び什物

No	資料名など	縦・高さ	横・幅	備考
1	内過去帳1号	28cm	20cm	
2	内過去帳2号	28cm	20cm	
3	内過去帳3号	28cm	20cm	
4	臨時宗執調査申告書	28cm	20cm	昭和2年7月作成
5	什物其他取調書	27cm	18cm	明治11年9月作成
6	日月牌過去帳	28cm	20cm	
7	田畑寄附記録	29cm	20cm	延享3年から明治22年まで
8	定徳寺側面図・正面図	40cm	55cm	明治22年作成(50分の1)

表2 定徳寺の什物其他(表1 No.5「定徳寺什物其他取調書」より八左衛門と関係のある項目を記す)

No	分類	名称	法量	備考
1	第1類	本尊阿彌陀如来	五尺一寸(台座共)	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
2		観世音菩薩	三尺三寸(台座共)	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
3		勢至菩薩	三尺三寸(台座共)	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
4		阿彌陀如来	四尺五寸六分 台座共	□□不詳天正年中開山慶公和尚講求メ傳來
5		善導大師	三尺一寸(台座共)	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付/明治六年三月住職山根法善再興ス
6		円光大師	三尺一寸(台座共)	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付/明治六年三月住職山根法善再興ス
7		世三所観音世二鉢	-	十九鉢一尺三寸、十三鉢一尺 獅子入/年度不詳 山根八左衛門寄付
8		地藏菩薩	四尺五寸六分	石仏 境内安置年度不詳 山根八左衛門寄付
9		地藏菩薩	貳尺八寸	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付/明治六年三月住職山根法善再興ス
10		地藏菩薩	貳尺八寸	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付/明治六年三月住職山根法善再興ス
11	第2類 (仏具什器之部)	九品曼荼羅 芯幅	幅七尺/長九尺	繪金□色/明治一一年四月一五日當寺山根法善講求御 【箱裏】曼荼羅一幅 石見國邑智郡吾郷村 定徳寺永代代什物也 明治十一年三月佛日求之 住職 山根法善代
12		釈迦涅槃像 芯幅	幅七尺/長芯□	極彩色/年度不明/山根八左衛門寄付
13		六字名号 一幅	-	祐天上人ノ書
14		三部經 芯部	-	繪紙金泥ニテ四巻入ノ山根八左衛門書写 寛保元西年五月十五日山根八左衛門寄付
15		寺号勸輪 空面直立額	-	干支不詳慶長年中ノ碩二代住職超譽和尚代ヨリ傳來
16		佛天蓋 芯蓋	-	木蓋/宝永七寅年當村山根八左衛門寄付
17		花曼	-	四流銀鍍金/宝永七寅年山根八左衛門寄付
18		花御堂并花機轉具	-	芯字匣□方付也/年度不詳 山根八左衛門寄付
19		金燈籠	-	芯封内一ツ額シ銀鍍金/年度不詳 山根八左衛門寄付
20		佛龕器 世五本組□金	-	年度不詳 山根八左衛門寄付
21		大花瓶 芯封銀鍍金	-	天保七申年八月邑智郡吾郷村山根利右衛門寄付
22		双盤 芯封	-	年度不詳 山根八左衛門寄付
23		喚鐘 芯口	-	宝永五子年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
24		鏡鏡 芯額	-	年度不詳 山根八左衛門寄付
25		銅鏡 芯筒	-	年度不詳 山根八左衛門寄付
26		淺黄地七条 芯枚	-	綴子 年度不詳當都當村山根八左衛門寄付
27	第2類 (建物部)	本堂 葺葺	-	縦六間/横四間半/三方縁付 宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門建立寄付
28		庫裡 棟葺	-	縦九間/横五間 □□不詳天明年中當寺十住職給譽和尚講求建立
29		總門 瓦葺	-	縦横一間四方 明治九年三月當村山根六十郎寄付
30	第2類 (附宅地山林之部)	障樓堂	-	瓦葺 縦横九尺四方/但年度不詳 旧傳來
31		田・畠・宅地・寺地・ 草山・竹藪・雜木山・ 墓地	-	※附宅地における詳細は紙面の都合上省略する。(筆者付記)
32				明治十一年九月三十日 山根法善御/同國同邑同小邑同郷/同村百廿廿番書 ノ裡家絶代ノ山根六十郎御(ほか絶代2名の書名、捺印)

※ No.13は徳川将軍家菩提寺である増上寺(東京都港区)の36番天大懸上の書で、元文3年(1738) 弟子の長孫が山根八左衛門轉勝院に造ったものである。
 ※ No.32の山根六十郎は元山根家5代山根八左衛門である。

(2) 定徳寺所蔵の史料

古文書(九々王山定徳寺田畑寄附記録・什物其他取調書・臨時宗執調査申告書)

九々王山定徳寺田畑寄附記録 塀帳で、8世岸譽上人の時、延享3年(1746)に作成。その後、寛延3年(1750)、弘化元年(1844)に追加があり、明治22年(1889)の吾郷村に存在した曹洞宗の岩松寺跡を処分した記事を最後にして終わる。書かれた内容は、簡単な寺伝から始まり、次に寺の「境内地、山林、田、畠」についての寄付、「常念佛科寄付田畑之事」となり、供養者の法名と寄付者名、土地や金額が記録されている。

什物其他取調書 塀帳で、19世法誉選山の時の明治11年(1878)9月に、役所に申告したものの控えとして作成された。最後の項に、住職、檀家総代(3名)、吾郷村用係担当職員が署名捺印し、さらに区長、戸長、副戸長が確認をしている。冊子の構成は第1類が仏像、経典、過去帳、六字名号、物類、第2類が仏具、什器、建物、耕宅地、山林が詳細に記述され、分かるものについては入手時期や山根八左衛門をはじめ寄付者も書かれている。

臨時宗執調査申告書 昭和2年(1927)7月に作成の塀帳が1冊ある。浄土宗務所の申告した書類の控えであり、前掲の取調書と内容が似ている。明治32年(1899)にも同様な調査があったことが表紙に注記されている。罫紙には記述項目が印刷されており、本尊、由緒、沿革、年中行事、歴代住職が記載されている。それに続き、財産明細帳調査書が綴られており、第1類仏像、第2類宝物、第3類什物、第4類地所(土地)・境内・墓地・山林、第5類建物、第6類什金、第7類雑種等が詳しく挙げられている。分かるものについては入手時期や寄付者も書かれている。

(3) 定徳寺と元山根家(八左衛門)との関係が分かる資料

喚鐘 本堂の西側の庇に吊るされている。総高は56cm、底部の径は33cmで、竜頭は双頭竜形で、撞壘は16の蓮子を持ち、池の間に銘文がある。銘文は3ヶ所あり、一箇所目には「願主 山根八左衛門尉/種

政/宝永八辛卯天五月廿三日」とあり、二箇所目には「諸行無常/是生滅法/生滅人已/寂滅已塵/京大佛住/西村左近丞宗春作」、三箇所目には「石州邑智郡吾郷村/松林山定徳寺種政院/常什物」とある。宝永8年(1711)に、京都の鋳物師左近孫栄(宗)春によって作られたことが分かり、願主は山根八左衛門種政(種勝)で、涅槃經の四句偈の一つが彫られている。なお、元山根家が檀那となった吾郷村の弥勒寺にも二代種勝の妻の千代が寄進した喚鐘^(註12)が残る。

華鬘 莊嚴具であり、内陣の長押に對て掛けられている。金銅製の團扇型で、蓮の花を透かし彫りで表している。紐の結びの中央に「松林山定徳寺常什物施主山根八左衛門種政」の文字が彫られている。

仏像(木造善導大師立像・木造円光大師立像)

定徳寺には本尊以外にも多くの仏像が安置されている。岩松寺など、付近の廃寺となった寺院や現本堂前にあった石見番外礼所の三十三観音堂(1間四方)から持ち込まれる仏像があるほか、近年注目された白鳳仏の銅造観音菩薩立像も傳來している^(註14)。これらの内、幾つかの仏像を取り上げて記載する。

木造善導大師立像 善導大師は中国唐代の浄土教の高僧。本像は木造で、高さ約40cmを測る。仏像は表面に彩色が見受けられる。三尊像の隣に厨子が設けられ、その中に安置されている。

「定徳寺什物其他取調書」には「宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付/明治六年三月住職山根法譽再興ス」と記されており、山根八左衛門が宝永7年(1710)に寄付し、明治6年(1873)には19世山根法譽選山が修繕または新調していることが説明してある。本像は宝永7年以前に作成されたものと考えられる。

木造円光大師立像 開祖法然の像である。木造で、高さ約45cmを測る。仏像には彩色が見受けられる。三尊像の隣に厨子が設けられ、その中に安置されている。

「定徳寺什物其他取調書」には「宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付/明治六年三月住職山根



写真10 華髻 (内陣東側)

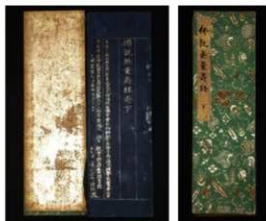


写真11 仏説無量壽經巻下



写真12 本尊木造阿弥陀三尊座像



写真13 木造善導大師立像

写真14 木造円光大師立像



写真15 浄土曼荼羅 (美郷町教育委員会撮影)



写真16 釈迦涅槃図 (美郷町教育委員会撮影)



写真17 歴代住職墓（東下方から）



写真18 山根八左衛門種勝と妻千代の墓標
（正面中央に「當山開基大權那」と彫られている）



写真19 定徳寺参道と山門周辺の石垣

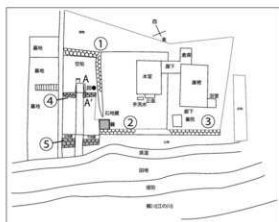


図7 境内と石垣の配置図
（「臨時宗軌調査申告書」の図面に一部加筆）



写真20 定徳寺山門下の階段と北側石垣

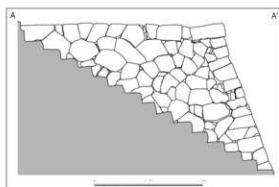


図8 定徳寺山門下の北側石垣実測図

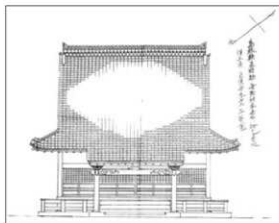


写真21 浄土宗定徳寺本堂正面図

法譽再興」と記されている。本像は宝永7年以前に作成されたものであると考えられる。

本尊木造阿彌陀三尊像 阿彌陀如来の坐像を中心にし、左右に観音菩薩・勢至菩薩像が配されている⁽²¹⁴⁾。

「定徳寺什物其他取調書」には「宝永7寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付」と記載があり、宝永7年以前に作成されたものであると考えられる。

經典 上記の「取調書」に載る經典は仏説阿彌陀經、觀無量壽經、無量壽經（上・下）の計4点が挙げられる。また、「寛保元酉年五月十五日山根八左衛門寄付」とあり、山根家が寛保元年（1741）に寄付したことが記載されている。4点とも縦30cm、横10cmの折本となっており、中は紺紙に金泥で写経している。このうち、佛説無量壽經下の奥書には「奉浄土三部妙典全部一部書寫九九王山種勝院定徳寺常什物納経仕意趣者為慈父頓學教替居士第/五十年忌慈母延譽貞壽信尼第三十三回忌追福也 施主 觀誓勝慶居士謹書寫/干時寛保元辛酉年五月十五日 俗名二世 山根八左衛門種勝（花押）」と書かれており、種勝が父種家（初代）、及び母千代（初代妻）のそれぞれ、50回忌、33回忌に併せて、經典を寄付していることが分かる。また、写経は種勝によるものであると記載されている。

仏画（釈迦涅槃図・浄土曼荼羅図）

釈迦涅槃図 釈迦が入滅した情景を描いた図である。山根八左衛門が寄付したと伝わり、江戸時代中期の作であると考えられる。⁽²¹⁵⁾

浄土曼荼羅図 諸仏の浄土を描いた曼荼羅である。

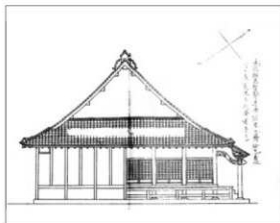


写真22 浄土宗定徳寺側面図

19世山根法譽選山が購入したと伝わる。箱書きには「曼荼羅一幅 石見國邑智郡吾郷村 定徳寺永代什物也 明治十一年三月佛日求之 住職 山根法譽代」と書かれており、明治11年（1878）以前に作成された仏画と考えられる。また、「臨時宗執調査申告書」には「元岩松寺附山根八左衛門寄付/明治十一年山根法譽□□寄附」と記載がある。曼荼羅図は元々岩松寺の所有であったものを廃寺に際して、仏像と共に定徳寺へ寄付したものであると考えられる。なお、岩松寺（岸松寺）は覚法寺の西側に位置していたが、明治9年（1876）に廃寺となっている。

（4）定徳寺に残るその他文化財

歴代住職墓（無縫塔） 歴代住職の墓は山門より西側の尾根上に位置している。この尾根上には元山根家墓地在けられており、住職の墓はそれより高い場所に設置している。

墓石は尾根上に平坦面が作り出され、東西方向に約7.7m、幅1m、高さ50cmの地元産デイスイト製の基壇上にある。無縫塔は歴代住職のもので、開山から21世までの計12基が配置されている。

以下、数基について記述する。

墓石は北端から2基目（2世超譽残香の墓石）が花崗岩製で、諸花等を伴わない。総高107cmを測り、塔身の高さは68cm、最大径が28cmである。基礎の上端は面取りされている。北端より3基目（3世の墓石）からは凝灰岩（福光石）製となり、諸花等は伴わない。6基目（6世還譽了空の墓石）は総高96cm

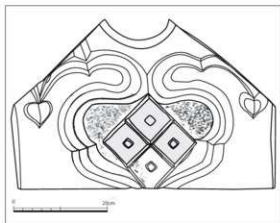


図9 定徳寺本堂鬼瓦実測図（「四つ目結」が付く）

を測り、塔身の高さは53cm、最大径が29cmである。基礎の上端は面取りを伴わない。同様の形態は10基確認される。これら墓石が配置される基壇はデイスイト製であることは前述したが、デイスイト製の基壇については邑智郡美郷町内のいくつかの石塔調査において確認されており、当地域における共通した特性であると思われる。

石塔群の配置順については墓石には住職の法名と世代が刻まれており、世代を見ると間山から順に基壇北端から配置されている。ただし、世代と法名が同一でない例が確認される。

墓石は移転した6世遷譽空のものよりも先の5世までが吾郷村に移ってから新たに作り直していると考えられる。北端からの2基とその他で石材、形態で差異が生じるのは作り直しの時期などの違いが関係していると思われるが、詳細は不明である。

山門の石垣 石垣は境内の図7の箇所位置している。図中の①～③は自然石及び瀧石の乱積みによる普請であるが、④、⑤は切石乱積みとなっている。④の箇所では花形と思われる築石から、岡山市の南西部で活動した備前石工の得意とする技術を確認できる^[186]。また、当石垣については、築石間に隙間が存在しており、中には間詰石を挟んでいる箇所もある。全体に老朽化が見受けられる。

①～③と④、⑤の石垣については積み方の違いから普請時期に差があると考えられ、「石見銀山における石垣の分類と変遷」^[187]では自然石による乱積みの石垣は古くから存在する技法であり、切石積

みの石垣は19世紀頃から見られるものであるとされる。

①～③の石垣はおおよそ境内を囲むように積まれている。このうち、参道に面する南側の石垣はその他の乱積み石垣と比べると高さなど、規模が大きい。また、石垣は現在の境内を方形状に囲うように積まれているが、本堂南西箇所は南西方向に突き出している。突き出した箇所の整地は現在畑地であるが、「寺伝」によると春日大明神の社が所在したとされている。

本堂南西箇所の石垣は入組んだ構造(橋形)になっており、浄土宗の寺院に見られる特徴であるとされる。そのため、石垣は境内を囲う意味のみではなく、参道付近の特徴的な構造を表現するために普請されたと思われる。

①から③の石垣については、元山根家「系図」の傳右衛門の子傳蔵と関係する記載がある。「寺の寺領を開き、石垣を積む」とあり、18世紀前半頃に2代八左衛門の甥の傳蔵が当石垣を普請した箇所にあたる可能性がある。

④、⑤については県道付近から山門までに2箇所、鐘楼基壇の3ヶ所で確認できる。このうち、山門下の石垣は山門と築造時期を同じにすると考えられる。「什物其他取調書」に山門は「縦横一間四方/明治九年三月當村山根六十郎寄付」と記載があることから、それぞれ明治9年(1876)の普請であると考えられる。なお、山門は控柱が四本存在する四脚門で、屋根には石州瓦が葺かれている。

明治22年(1889)の本堂図面と鬼瓦 本堂の図面は正面図と側面図の2枚がある。共に「鳥根景」の文字が見受けられ、「臨時宗執調査申告書」の本堂の箇所に「明治廿二年屋根改築」とあることから、明治22年(1889)の19世(法譽蓮山)の時に改築を行った際、作成されたものであると考えられる。また、改築時の元山根家当主は八代山根隆直であり、明治22年から大正15年(1926)の間に4期吾郷村村長を勤めた人物である^[188]。改築は隆直が村長に就任した最初の年にあたる。

正面図は縦40cm×横50cmの用紙に、50分の1の本

堂正面図が描かれている。側面図は本堂側面が正面図と同様に表現されている。図面から改築後の本堂は間口4間半、奥行6間となり、本堂の屋根に赤瓦の石州瓦が葺かれていることが分かる。「定徳寺什物其他取調書」には、本堂が葺ききであると記載があるため、少なくとも明治11年(1878)までは葺ききであるが、明治22年の改築まで、葺ききであった可能性が高い。また、「定徳寺什物其他取調書」と図面における本堂の間口は同じであるため、平面的な大きさには変化が見受けられない。

図面中の棧瓦は現在の石州瓦に葺き替えられ、不要となり、鐘樓の脇に置かれている。赤い釉薬で塗られた鬼瓦は縦36.2cm×横56.4cmで、側面に2ヶ所、上面に4ヶ所、下面に2ヶ所のほぞ穴が存在する。なお、正面には「山根家」の家紋である「四つ目結」が表現されている(図9)。

4. 小結

(1) 創建期から移転までの定徳寺と墓地(石塔)

石見銀山の繁栄と銀山に点在する寺々の造立とは前述したように深く関わっている。寺院の造営を創建年別に見ると、1500年代が23寺、1643年までが16寺となり、江戸時代初めで、全体の9割を占める。⁽¹²⁰⁾ また、石見銀山の六谷に所在する墓地群は天正期の1580年代以降に成立し、そのころに開山した寺院は谷合や尾根上に存在する。寺が点在する鉱山集落の背後の尾根には墓域が形成されていたと考えられる。

定徳寺も天正期間に大谷の往還沿いに建立され、江戸時代初頭には有力寺院の一つになっていたと考えられ、「寺伝」に記載の後陽成天皇の勅額や紫衣の下賜などがそれを裏付けている。さらに、寺跡の背後にある徳善寺上墓地には、天正期から寛永期(1624~1644年)にかけての紀年銘の法名に「譽」号をもつ浄土宗の石塔が多く見つかった。⁽¹²¹⁾ また、寺跡の背後の崖面に穿かれた二箇所の岩窟があり、西側の窟には宝篋印塔が現存する。基礎に彫られた法名には「信士」の銘が認められる。石材は緑色凝灰岩(福光石)で、総高2m程の組合せ石

塔であり、大規模な石塔といえる。17世紀前半のもので、大型石塔は銀山に関わる山師等の檀那層の供養塔と推定される。⁽¹²²⁾

(2) 定徳寺の銀山からの移転

その後の17世紀中頃になると、銀の産出量が減り、併せて銀山での人口も減少の一途をたどる。これにより寺院の維持も難しくなり、17世紀中頃から18世紀初頭にかけて、銀山から他地域へ移転する寺院も多くなる。⁽¹²³⁾

墓地に残る石塔の紀年銘からみても、17世紀中頃のものも少なく、人口減少を裏付けていると考えられる。前出の徳善寺上墓地でも、この時期以降の石塔は少なくなる。⁽¹²⁴⁾ この時期には銀山の六谷にあった定徳寺を支援する檀那がいなくなったと推定され、住職の3世~5世以降の17世紀後半には寺は荒廃したと推定される。このことは「寺伝」に「年年衰微檀越漸漸散因茲四十年來主盟不住」(写真2)と記されている。

(3) 定徳寺移転と山根八左衛門

定徳寺の移転を行ったのは邑智郡吾郷村の山根八左衛門種勝(1675~1745)で、元禄期から享保期にかけての人である。山根家は江戸時代には「新屋」(屋号)と呼ばれ、村役人や庄屋を務めた旧家である。2代種勝は17世紀後半に財をなし、菩提減罪のために石見銀山の六谷にあった荒神寺(移転後の寺号は弥勒寺)と定徳寺を吾郷村に移転させて再興している。また、同村の氏神である天津神社においても多額の寄付を行っており、同社の棟札にも八左衛門の名前が多数載る。⁽¹²⁵⁾ 現在、社殿前に建つ享保2年(1717)銘の鳥居には寄進者である長兄傳右衛門と四男八左衛門の名前が認められる。⁽¹²⁶⁾ 元山根家は江戸時代を通して地元の有力者であったが、昭和47年(1972)の江の川水害等で史料の多くが失われ、詳細なことは不明である。また、前記の弥勒寺は本尊弥勒菩薩像と喚鐘を残すのみであり、縁起や移転の様子を知る史料は残されていない。よって、ここでは定徳寺の移転についてのみ見てみたい。

寺の移転は前述したように江戸時代中頃の宝永7年(1710)で、6世遷譽了空(了悦)の時にあたる。

元山根家の2代八左衛門種勝が堂宇を建立し、明治11年(1878)の「什物其他取調書」に書かれているように、仏像や仏具をはじめ寺領等の財産も同時に寄付している。なお、大森町の大谷から移されたものは仏像や仏具は前述したように、本尊の木像阿弥陀如来立像や扁額などに限られたもので、墓地や石塔は現地に残されたままとなっていたと推定される。仏像では本尊の阿弥陀如来坐像と勢至菩薩坐像、観音菩薩坐像をはじめ、善導大師立像、円光大師立像等を寄付し、建物としては本堂、庫裏、鐘楼、山門などを建立している。さらに、元山根家の「系図」には元山根家の一族で、八左衛門以外で寄付をしたことが分かる人物として、前述した傳右衛門の長男の傳蔵がいる。「系図」には境内南側の石垣を築いていたとある⁽¹⁸²⁰⁾。時期からみて、山門の崖面に積まれた自然石の石垣がこれにあたるであろう。

江戸時代中期に、「寺伝」に記載のように寺の移動については元山根家の財力によるところが大きい。ただし、「什物其他取調書」を見ると、地元の吾郷村をはじめ、周辺の浜原村等の檀家の名前も僅かであるが、書かれているので協力者の存在も考える必要がある。

(4) 移転する寺院と援助者(大檀那)

寛永期以降の銀生産の減少に伴い鉱山集落が衰退し、⁽¹⁸²⁷⁾ 銀山から寺院が遼東郡内をはじめ、隣接の安濃郡、邑智郡の江の川沿いの村に、17世紀末頃から18世紀初頭の元禄期から享保期に掛けて移転した例が多い。⁽¹⁸²⁸⁾ この移転を促し、援助を行った定徳寺の山根八左衛門のような援助者(大檀那)を「石見銀山百か寺」の記述より拾い上げると表3となる。

名前をみると、農村では庄屋などの村役人を兼ねた豪農が多く、江の川沿いの町や日本海の港町では有力商家も含まれる。また、定徳寺の場合は援助の内容が「什物其他取調書」等の史料に記載があり、仏像、仏具、建物や田畑、山林などの財産等が具体的に知れる。しかし、石見銀山百か寺の場合は既に数百年も経っており、史料の残り具合もそれぞれに異なるので、個々の寺を調べて、参考にするしかないであろう。

(5) 定徳寺調査の課題

最後に今後の課題を4点に絞って、列記したい。

まず、1点目に移転前の定徳寺についてである。16世紀後半の開山法譽慶と本山の輪番職に任じられた2世起譽残香の経歴は「寺伝」以外では今のところ史料などの情報が殆ど存在しない。それらの情

表3 石見銀山から移転した寺院の援助者(大檀那等) (「石見銀山百か寺」を元に作成)

石見銀山百か寺	宗派	移転に関わった援助者(大檀那等)	移転年代
明鏡寺	浄土真宗	本釜田家(遼東郡静岡村)	寛永年間か、享保年間
法寿寺	浄土真宗	恒松源兵衛(安濃郡島井村)	寛永17年
法久寺	浄土真宗	敷資賢(遼東郡福原村)→同郡湯里村	安永9年
殊勲寺(田原寺)	真言宗	山根八左衛門(邑智郡吾郷村)	元禄年間
尊念寺	浄土宗	郷原勝久(遼東郡湯里村)	元禄2年
報恩寺	浄土宗	丸山七郎兵衛外権家(遼東郡磯竹村)	元禄2年
尊忠寺	浄土真宗	船平左衛門(那賀郡上河戸村・庄屋)	元禄13年
定徳寺	浄土宗	山根八左衛門(邑智郡吾郷村)	宝永7年
蓮花寺	浄土宗	平田貞右衛門(邑智郡川本村)	正徳2年
淨因寺	浄土宗	船兵左衛門(那賀郡上河戸村・庄屋)	正徳4年
大満寺	浄土宗	石川勘左衛門(安濃郡島井村・元銀山役人)	享保元年
淨土寺	浄土真宗	前原家(遼東郡久利村・檀越)→同郡長久村	享保年間以前
快算院普門寺(日光院)	真言宗	森久兵衛(那賀郡都治本郷)	享保8年
瑠璃寺(日徳観寺)	曹洞宗	恒松六右衛門(安濃郡長久村・頭百姓)	享保8年
西善寺(田西善坊)	浄土真宗	森山家(遼東郡久利村)	—
勝音寺	曹洞宗	中原三郎兵衛(年寄・頭百姓)一族(遼東郡大因村)	(17世紀後半～18世紀初頭)

報は本山や浄土宗の寺院など、関係する古文書や文献の調査を行う必要がある。

2点目は16世紀後半から17世紀前半にかけての石見銀山繁栄期において定徳寺を支えた大檀那についてである。移転前の寺院の様相を知る上で必要な情報であったが、今のところ史料がなく、どのような人々が関わっていたか不明となっている。今後の文献史料調査や墓地・石造物調査等の成果を待ちたい。

3点目は宝永年間の移転に関する八左衛門種勝についてである。移転の実態は百か寺に共通する事項であるが、江の川沿いの邑智郡吾郷村に寺を再興した際、援助した八左衛門種勝の事績は古文書や記録類が失われており、殆ど不明となっている。これについては地域での文献史料をはじめとする各分野の調査に待ちたい。

4点目は、18世紀前半の移転、再興した定徳寺と吾郷村をはじめ周辺の村々の檀家との関わりである。これも3点目同様に重要であるが、不明な点が多い。今後、過去帳や位牌をはじめ、各専門分野から調べていく必要がある。

5. おわりに

一石見銀山における寺院調査の必要性一

戦国期から江戸時代初期の銀山最盛期には、銀山六谷と呼ばれた仙の山周辺の鉱山集落に多くの寺院が存在していた。その場所については、これまで大田市教育委員会の銀山遺跡調査の一環として埋蔵文化財分布調査をはじめ、明治期に作成された地籍調査の字名調査等である程度、場所や規模が確認されている。また、江戸時代や明治期の古文書や絵図などからも調べが進んでいる。一方、銀山に点在する墓地や石塔についてもここ二十年來の鳥根県教育委員会と大田市教育委員会による石造物調査で、墓地の分布や石塔・墓標の種類や変遷など、多くの調査成果があがっている。⁽²⁹⁾

民間機関の調査としては平成7年に刊行された三瓶古文書読もう会の『石見銀山百か寺』がある。この書籍は個々の寺院の創建から変遷までが簡潔に記述され、各寺院の由緒・縁起を把握するうえで

貴重である。ただし、寺院調査の現状についてみると、多くの指定文化財を有す清水寺⁽³⁰⁾をはじめとして、大森町に所在する寺院では専門家による総合調査はこれまで行われていない。また、その後には銀山から他地域へ移転した寺院も、多くが過疎地に存在しており、前述した課題を含め、史料の確認、聞き取りは早急に行うことが望まれる。

最後に、この度の定徳寺の報告が石見銀山各地域での寺院調査の契機になることに期待したい。

謝辞

定徳寺住職門田行陽様には3年前の元山根家の墓地調査から始まり、今回の定徳寺の調査に至まで多くのご教示を頂きました。厚くお礼申し上げます。また、元山根家の山根千代様をはじめ、多くの方々にもいろいろとお世話になりました。記して感謝致します。

機関：定徳寺、美郷町教育委員会

個人：岩谷知広、岩橋孝典、遠藤浩己、尾村 勝、
門田行陽、清水佳那子、新川 隆、仲野義文、
乗岡 実、幡中光輔、的野克之、三上利三、
八幡一寛、山根千代、山根昌子

(50音順、敬称略)

注

- (1) 『石見銀山百か寺』三瓶古文書読もう会 1995
- (2) 元山根家2代で、初代八左衛門種家の四男。(西尾克己・幡中光輔・持田直人「邑智郡美郷町 元山根家墓地の特質と墓標の変遷」『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究12』鳥根県教育委員会2022)
- (3) 「内過去帳一号」の最初に書かれた由緒書である。ここでは「寺伝」と記す。
- (4) 『邑智町誌』下巻1978、「定徳寺」『石見銀山百か寺』三瓶古文書読もう会 1995
- (5) 本山で説教や法話をを行う当番の僧
- (6) 『土地令の絵図』本曾家所有 明治4年(1871)作成
- (7) 『旭町誌』旭町1977
- (8) 吾郷村に移転の後に、関係があった浄土宗寺院の住職の位牌も存在している。
- (9) 位牌の型式は『仏具大事典』株式会社鎌倉新書1982による。

- (10) 『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 石見銀山〔龍昌寺跡〕』 高根県教育委員会・大田市教育委員会 2002
- (11) 『秘仏への旅―出雲・石見の観音巡礼―』 高根県立古代出雲歴史博物館・高根県古代文化センター 2008
- (12) 『邑智町誌』下巻 邑智町1978「定徳寺」の項の「寺伝」による。棟梁安江利右衛門は大森の城上神社境外社長砂神社本殿（元禄7年(1694)）などの造営に関わった大工である。（『史跡石見銀山遺跡総合整備事業報告書別冊2 一史跡石見銀山山内建造物（10社寺）調査報告書―』高根県大田市 2013）
- (13) 弥勒寺の喚鐘には「施主 山根六左衛門種勝室 / 於千代 / 本願開山□□□成観 / 享保五庚子年九月吉辰」とある。なお、弥勒寺は吾郷村に位置する真言宗の寺である。元々、銀山大谷に覚神寺として建立されたが、元禄年間に種政（種勝）によって当地へ移転したという。（『邑智町誌』下巻 邑智町 1978）、移転に際して寺号を弥勒寺に改めたと寺伝にあると記す。
- (14) 注（11）に同じ。
- (15) 『美郷町の文化財』美郷町教育委員会 2022
- (16) 乗岡 実「石見で活躍した備前石工」『石見銀山研究―2号―』石見銀山研究会 2022
- (17) 尾村勝・新川隆・乗岡実・西尾克己「石見銀山における石垣の分類と変遷―温泉津及び周辺地域を中心として―」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5』高根県教育委員会・大田市教育委員会 2023
- (18) 『邑智町誌』下巻 邑智町 1978
- (19) 注（1）に同じ。黒河邦之「石見銀山寺院調べ」1986（私版）でも創建年代を表にまとめている。
- (20) 2023年度に、高根県教育委員会と大田市教育委員会とにより石見銀山遺跡石造物調査の一環として大谷地区の徳善寺上墓地の石塔調査が行われている。
- (21) 『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 石見銀山―分布調査と墓石調査の成果―』高根県教育委員会・大田市教育委員会 2005
- (22) 注（1）に同じ。
- (23) 高根県教育委員会文化財課の岩橋孝典氏、大田市教育委員会石見銀山課の尾村勝氏、新川隆氏の教示による。
- (24) 『邑智町誌』下巻（邑智町1978）の「天津神社」、「社殿等の沿革（種札）」の項による。
- (25) 鳥居の東側にある柱の銘文には「奉寄進 山根八左衛門藤原種勝 山根傳右衛門藤原種喜 敬白」とある。また、石材は瀬戸内の花崗岩で、石工は和泉国の工人である。永井泰・齋藤正2014『鳥根の石造物データ―狛犬を中心とした幻の石工達の実能にせまる―』（人名については一部修正）
- (26) 美郷町吾郷にある覚法寺の境内には、山根傳藏が元文5年（1740）3月に建てた「南無阿弥陀佛」の六字名号碑が残る。なお、傳藏の名は天津神社の「種札」からも確認できる。（波多野虎雄「神社」『邑智町誌』下巻 邑智町 1978）
- (27) 仲野義文『銀山社会の解明―近世石見銀山の経営と社会―』清文堂2009
- (28) 仲野義文2006「江戸時代における銀山町の人口動向と社会構成について」『宗門改帳からみる山除の近世社会』山除宗門改帳研究会
- (29) 『石見銀山遺跡石造物調査報告書21―分布調査と墓石調査の成果（2005―2022）』高根県教育委員会・大田市教育委員会 2024
- (30) 石見銀山遺跡山内に現存する主要な寺社建造物については、大田市教育委員会により基礎的な資料を得ること等を目的に調査が実施されている。『史跡石見銀山遺跡総合整備事業報告書別冊2 一史跡石見銀山山内建造物（10社寺）調査報告書―』高根県大田市 2013

世界遺産石見銀山遺跡の調査研究 14

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 14

令和6（2024）年3月

- 編集 島根県教育委員会（松江市殿町1番地）
大田市教育委員会（大田市大田町大田口1111番地）
- 発行 島根県教育委員会
島根県教育庁文化財課世界遺産室（TEL0852-22-5642）
URL <http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaisan/>
- 印刷 株式会社 報光社

